

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (1)
— 『原初年代記』 への追加記事 (1110 ~ 1117 年)

中 沢 敦 夫

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』 への追加記事 (1110 ~ 1117年)

中 沢 敦 夫

1. 『イパーチイ年代記』 について

本稿から始まる連載で翻訳と注釈を試みるのは、キエフ・ルーシ史研究のもっとも基本的な史料である『イパーチイ年代記』(Ипатьевская летопись)の、『原初年代記』(Повесть временных лет)以降の部分、記事の年代から言うと、6618(1110)年から6800(1292)年に相当する部分で、ほぼ12~13世紀をカバーしている。

『イパーチイ年代記』は中世ロシアのほとんどの年代記(летописи)がそうであるように、様々な時期に成立した個々の歴史的・年代誌的な記録が、特定の段階でまとめられて編集され、それがさらに何度かの再編集を経ることで成立した「年代記集成」(летописный свод)である。その名称は、北東ルーシの城市コストロマ郊外のイパーチイ修道院(Ипатьевский монастырь)に収蔵されていた15世紀の10~20年代成立の「イパーチイ写本」(Ипатьевский список)(ペテルブルグ、科学アカデミー図書館蔵)からきている。『イパーチイ年代記』はこの写本が基本テキストとされるが、同じ構成をもつ後代の写本が複数存在することから、それらに共通するテキストをもつ年代記集成を『イパーチイ年代記』と呼んでいる。この年代記の有力な写本としては、16世紀後半に南西ルーシで成立した「フレーブニコフ写本」(Хлебниковский список)(ペテルブルグ、ロシア国立図書館蔵)があり、これによって部分的に、「イパーチイ写本」における誤記、空白を補うことができる。また、以下にのべるように、これは『原初年代記』の成立を考える上でも重要な写本でもある。その他の写本は、基本的に系統を「フレーブニコフ写本」に発していることから、刊本の校訂テキストは、「イパーチイ写本」を底本にして、「フレーブニコフ写本」の異読(ときに「ポゴジン写本」を含む)を参照して作成されるのが通常である。

『イパーチイ年代記』は、大きく、『原初年代記』(年記としては852~1110年)、『キエフ年代記集成』(Киевская летописный свод)(1118~1200年)、『ガリチ・ヴォルィニ年代記』(Галицко-Волынская летопись)(1201~1292年)の三つの部分からなっている。

最初の、ルーシ初期の歴史を記述した『原初年代記』は、以下に述べるように、この部分だけを取ると、『ラヴレンチイ年代記』『ラジヴィール年代記』などこれを含む年代記(写本)は多数に及び、明らかにひとつの完結した編集段階を想定することができる。この部分については、『イパーチイ年代記』からの異読を含んだ学術的な邦訳がすでにあることから(『ロシア

原初年代記』(1987年)[ロシア原初年代記]), 本連載では扱わない。

第二の部分の『キエフ年代記集成』は12世紀末のキエフでウラジーミル・モノマフ公とその一族の関係者によって編纂され、第三の『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』は、13世紀末に、モンゴル・タタールの影響が弱かったガーリチ・ヴォルィニ地方で、ダニール・ロマノヴィチ公とその一族の手で成立したとされている(詳細については翻訳の当該個所で論ずる予定)。

大ざっぱに言うなら、『イパーチイ年代記』は、このような、時代が異なり地域的にも独自に編集された三つの部分を、ほぼ機械的に結合してなった長大な年代記集成ということになる。ここでは、15～16世紀に編集された大部な年代記集成(たとえば、『ノヴゴロド第四年代記』『ソフィア第一年代記』『ニコン年代記』)にみるように、最終編集者の歴史観にそって、資料とした年代記記事を、古い年代の記事も含めて、全面的に書き改めるようなことは行われていない。そのおかげで、同時代の資料がほぼそのまま記事に反映されていると考えられており、『イパーチイ年代記』は13世紀末までの南・南西ルーシの歴史を知るためには価値の高い重要な史料とされている。筆者が翻訳と注釈を試みる主な理由もそこにある¹⁾。

2. 『原初年代記』の編集史について

本連載の第1回目では、『キエフ年代記集成』の翻訳に入る前に、『原初年代記』と『キエフ年代記集成』をつなぐかたちになっている、『イパーチイ年代記』の、6618(1110)～6625(1117)年の記事の翻訳と注釈を行う。この部分は、『原初年代記』の主要諸写本の共通部分から離れ、『イパーチイ年代記』だけに認められる記事であり、なおかつ、のちの『キエフ年代記集成』の編集とは別個に行われたとされている部分である。研究史上は、『イパーチイ年代記』だけに見られる『原初年代記』の追加編集記事と考えられている。

この部分の成立、筆者(编者)、内容的な特徴について考えるためには、『原初年代記』そのものの成立過程(編集史)をある程度全体的に見通しておく必要がある。この問題については、学術的な邦訳である1987年刊行の『ロシア原初年代記』[ロシア原初年代記]でも、残念ながらほとんど解説がなされていないので、本論の趣旨とはややずれるが、以下に概観しておきたい。

ルーシ(ロシアをはじめとする東スラブ地域の古名)の歴史を編年体で叙述した「年代記」(летопись)とよばれる歴史書は、時代や地域によって様々な種類があり、数千点に及ぶ写本によって現在に伝わっている。なかでも、もっとも古い時代の歴史を伝える年代記写本の多くは、興味深いことに、冒頭から1110年(創世紀元6618年)までの内容がほぼ一致している。さらに、これらの写本の冒頭には、「過ぎし歳月の物語。フェオドーシイ洞窟修道院の修道士記す。ど

1) 『イパーチイ年代記』については膨大な研究があるが、概説としては[СККДР Вып.1: С.235-241]の記事を参考にした。ここには研究書誌も載っている。

こからルーシの地はやって来たか。だれが初めにキエフにおいて公として治め始めたか。どのようにしてルーシの地は成立したか²⁾ という長い標題が、共通して付されている。このことから、近代歴史学が始まった当初から、この部分は、特定の人物によって執筆・編集された、ルーシ最古の歴史を伝える年代記として認められ、最重要史料として歴史家の注目を集めてきた。

現在『原初年代記』³⁾ と呼ばれているこの年代記を書いたのは誰なのだろうか。この年代記の代表的な写本「ラヴレンチイ写本」(1377年)の1110年の記事の末尾には、「私、ミハイル修道院の典院〔修道院長〕シリヴェストルが(…)この年代記(летописец)の書を書いた」と記述があり、「6624(1116)年」という紀年まで付されている。これだけ見れば、このシリヴェストルが『原初年代記』の編者だと了解してしまいそうだが、年代記の表題には「フェオドーシイ洞窟修道院の修道士」が書いたとなっており、そもそも帰属する修道院が異なっている。また、この年代記にはキエフの洞窟修道院に関する記録が多数含まれており、著者がこの修道院の出身者であることは動かしようがない。そのようなわけで、シリヴェストルの記述は、すでに存在していた年代記の末尾にシリヴェストルが書き足したにすぎないということは明らかである。

では、この「洞窟修道院の修道士」とは誰であるのか。これについては、①この年代記の重要な写本のひとつである「フレーブニコフ写本」(16世紀後半)には、「修道士ネストル」(Нестор черноризец)と名が示されていること。②洞窟修道院の歴代の修道士たちの生活を伝える『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の中で、修道士ネストルをはっきりと「年代記を書いた者」(иже ты написа летописец)と呼んでいること。この2点を主な論拠として、この年代記が研究され始めた当初から、「ネストル」という修道士が編者であるとされ、これが現在に到るまでほぼ定説になっている。シレッツェル、カラムジンをはじめとする初期の歴史家たちが、この年代記を「ネストル年代記」(Летопись Нестора)と呼んでいるのも、この説に拠っている。

しかし、20世紀に入ってこの年代記の研究が進むにつれて、この年代記の成立の過程が次第に明らかになり、編者についても様々な説が出されるようになった。それまでの定説では、

2) 原文では、Повесть временных лет черноризца Федосьева монастыря Печерского, откуда есть пошла Русская земля и кто в не почал первее княжити и откуда Русская земля стала есть ただし写本によって異同がある。

3) ロシア、ウクライナなどでは標題の冒頭の句をとって Повесть верменных лет と呼ばれている。これをそのまま日本語に訳せば『過ぎし歳月の物語』となるが、日本の歴史学ではこれを指す通用名として『原初年代記』が用いられている。この訳語は英語圏で用いられていた "Primary Chronicle" の名称に発すると思われるが、これに対応するロシア語の "Начальная летопись" がソビエト・ロシアの歴史学では最初期の年代記の一般的な総称として用いられていることから、誤解を生ずるおそれがあり、訳語としては適当とは言いがたい。しかしながら、日本ではすでにこの年代記の固有名として『原初年代記』が定着していることから、本稿でもこの名称を用いることとする。

12世紀の10年代にネストルが、身近にあった様々な種類の史料をとりまとめ、編集してこの年代記をつくりあげたと考えられていた。しかし、文献学的手続きによってテキストの「地層」を特定し、各層の成立の事情を探っていく編集史研究の深化によって、11世紀30年代、11世紀70年代、11世紀末とそれぞれの段階で編集が加えられ、年代記が順次「成長」していったことが明らかになってきた。

ただし、地層が積み重なるように、単に新しい記事が書き継がれて「成長」してきたわけではない。各段階の編者は、先行する年代記を、自分の編集意図にそって書き足し、削除し、修正するなどの作業を行っている。中でもネストルは、冒頭に標題を付し、編年の全体的な整合性を整えるなど、これまでにない総括的な編集を年代記にほどこしている。それも、標題に見るように、「ルーシの地」すなわちルーシ国家とその支配一族の由来の正当性を証明し、それを、自身の正教キリスト教の世界観と結びつけるという明白な意図のもとに作業を行っている。おそらく、このような編集構想の大きさと、強いイデオロギー性こそが、かれの年代記が後代に普及した大きな理由ではないだろうか。

『原初年代記』の編集には、以上のような前史だけではなく「後史」もある。これは、本稿の翻訳・注釈にかかわる部分なので、やや詳しく見ていきたい。

『原初年代記』を含む年代記の諸写本は、1111年以降も年代記記事が続いており、この年で切れている写本は一本も伝わっていない。つまり、ネストルが書いたと推定されるテキストが手つかずで写本に残されていることはなく、現存するテキストは、程度の差はあれ何らかのかたちで、ネストル以降の編者による追加や改変がなされていると考えなければならない。先に、諸写本の冒頭から1110年までの部分が一致していると述べたが、諸写本を照合していくと、確かに追加や改変によって生じたと見られる異同が認められ、それによって写本は大きく二つのグループに分類できることが明らかになった。第一は、「ラヴレンチイ写本」に代表されるグループ、第二は「イパーチイ写本」に代表されるグループである。そして、興味深いことに、二つのグループは、1111年以降の年代記事が大きく異なっているのである。このことは、ネストルが編集した年代記が、わずかな度合いであれ、さらに編集を加えられ、その結果としての再編集テキストが写本の中に伝えられていることを意味している。

20世紀前半の代表的な年代記研究者A・シャフマトフは、綿密な諸写本の考証の結果、1110～1112年(後には1113年の可能性にも言及)にネストルが洞窟修道院で『原初年代記』(第1版)を書き上げた後まもなく没したが、そのテキストはそのままの形では現存はしていないと考えた。そこでは、標題にネストル自身の名が書き込まれており、上述のフレーブニコフ写本にはこの記載がころうじて残ったが、他の写本ではすべて後の再編集者の手で削除されたとした。

1113年4月、キエフ大公スヴァトポルク・イジャスラヴィチが没し、それを機に発生したキエフ市民の騒乱を制したウラジーミル・モノマフが、同年5月に大公位に就いた。スヴァトポ

ルクは洞窟修道院に個人的な庇護を与えており、おそらくはネストルの年代記作成を援助していたと思われる。だが、大公の死を契機に、新しいキエフ大公ウラジーミル・モノマフの命令によって、洞窟修道院にあった『原初年代記』第1版の写本は、モノマフの庇護下にあったキエフ郊外のミハイル・ヴィドヴィツキ修道院に引き渡され、典院シリヴェストルに年代記の編集、書き継ぎの作業が委嘱されたと推定される。その結果、第1版の1110年までの記事に若干の手が加えられ(標題からネストルの名を削除する、使徒アンデレのルーシ訪問の逸話を挿入するなど)、上述のシリヴェストルによる跋文が書かれ、さらには1093年～1115年のウラジーミル・モノマフ一族に関する記事が書き足された。これが、1116年の再編集版で、シャフマトフ説によれば『原初年代記』第2版ということになる。そして、そのテキストは主に『ラヴレンチイ年代記』グループの諸写本によって伝わっているとされる。

さらに、ネストルのテキスト(第1版)は、ウラジーミル・モノマフのキエフ大公就位後まもなく、その長男でノヴゴロドの公位に就いていたムスチスラフの手にも渡った。そして、ムスチスラフが、配下の有力者に委嘱して、1111年～1117年の記事を別個に書き継がせた。同時に、1110年以前の部分についても、ノヴゴロドにあったモノマフ一族に関する手持ちの史料を用いて、部分的な加筆・改変が行われた。こうして、1118年の後半に『原初年代記』の新しい版(第3版)が成立し、これは『イパーチイ年代記』の諸写本の中に反映しているとされている。この作業に際しては、第1版のみならず、キエフのシリヴェストルの手で作成された第2版のテキストもあわせて利用したために、「イパーチイ写本」の標題部分にはネストルの名は削除されたままになったとシャフマトフは考えている。

3. 『原初年代記』の追加編集記事(1110年～1117年)について

以上概観した編集史で明らかなように、本稿で訳出する『イパーチイ年代記』の部分は、シャフマトフ説による『原初年代記』第3版における、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ公配下の関係者が書き継いだ1110年～1117年の追加編集記事ということになる。6618(1110)年の記事については、既存の記事の途中から、編者が書き足したかたちになっており、ここからが追加編集が始まっている⁴⁾。この部分は、『イパーチイ年代記』全体から見れば、『原初年代記』と『キエフ年代記集成』を橋渡しする部分ということになるが、記事の分量は決して少なくなく、また、12世紀10年代のルーシおよびノヴゴロドの政治状況を伝える貴重な史料である。

4) この追加編集部分、すなわち、1110年記事の「(…)これは予言者ダヴィデが『主はあなたのために御使いに命じて、あなたを守らせてくれる』と言ったとおりである。」以下の部分は、邦訳の『ロシア原初年代記』(1987年)の注釈として訳出されているが[ロシア原初年代記 545～547頁]、この記事は明らかに、1117年までの編集を手がけた追加記事編者の筆になることから、あらためて訳出することにした。

個々の記事の内容やその成立背景については注釈に譲るとして、この部分の編著者（シャフマトフ説によれば『原初年代記』第3版の編者になるが、以下では「追加記事編者」と呼ぶ）の人物像とこの部分の編集方針について考えてみたい。

本稿で訳出した追加記事を一覧しただけで、ウラジーミル・モノマフ公一族関係の記事が圧倒的に多いことは歴然としている。1111年のポロヴェツ掃討遠征が詳しいのは、モノマフ公への神の加護を強調するためである。それ以降、1111～1117年の記事はモノマフ一族関係の情報で埋まっていると言っても過言ではなく、モノマフ一族と追加記事編集者との近い関係は明らかである。

実は、かれは追加記事を書き継いだだけではなく、『原初年代記』の記事にも部分的な加筆を行っていると言われる。それは、『ラヴレンチイ年代記』系列のテキストと『イパーチイ年代記』のテキストとの校合によって明らかにすることができる。かれによる加筆と考えられる主なものは、1076年のフセヴォロド・ヤロスラヴィチ公のキエフ大公位就位の日付を1月1日と特定してあること、1086年のキエフのアンデレ修道院創建、1101年のモノマフ公によるスモレンスクでの聖母教会定礎、1102年のモノマフ公の息子アンドレイの誕生などであり、やはりモノマフ公の一族にかかわる事柄である。

追加記事の中で興味深いのは、1113～1114年に、モノマフの長男ムスチスラフがノヴゴロドで行った事業について触れられており、それに続いて、「わたしがラドガに来たとき…」と編者による一人称のガラス玉のしるしについての記述があることである。ひとまずは、この「わたし」が追加記事編者自身を指すと想定するならば、かれは、ムスチスラフ公のもとでノヴゴロドで勤務しており、1114年にはなんらかの理由でラドガを訪れたことになる⁵⁾。そして、1117年には、ムスチスラフ公が公座を移したことにともない、同行してキエフ郊外のベルゴロドに移り住んだと考えられる。ムスチスラフの公座遷移が、父モノマフ公のキエフ大公位を継承する準備であるとするならば（本稿の注116を参照）、これまでヴィドヴィツキ修道院に委ねられていたモノマフ一族の年代記執筆の仕事もまた、この時点で息子のムスチスラフに引き渡されたと考えて無理はないであろう。

追加記事編者は、モノマフ公からムスチスラフ公への権力継承の準備の一環として、『原初年代記』の改訂を行った。その作業には、モノマフ公の『教訓』（Поучение）を年代記の1096年の項に入れることも含まれていた。なぜなら、『教訓』には、1117年の、ヤロスラフ公討伐のためのヴラジミル城市包囲のことも記されており、編者は書き上げられたばかりのモノマフ

5) 『原初年代記』の862年の項で、『ラヴレンチイ年代記』系では三人兄弟のうち長兄リューリクは「ノヴゴロド」に座したと書かれているのに対して、『イパーチイ年代記』系では「ラドガ」となっているのは、後者においては、追加記事編者が、ラドガの住民から聞いたリューリク到来伝説を反映させたものと、シャフマトフは解釈している。[Шахматов 2003: С. 552].

公の息子たちに宛てたいわば〈遺訓〉を、編集中の年代記に編入したと考えるのが自然だからである。研究者たちは一様に、本稿の翻訳部分に反映されている追加記事の編集は1118年になされたとしている(最後の記事にあるアレクシオス帝の死去とヨハネス帝の即位が1118年8月であることから)。その場所は、ベルゴロドかキエフであろう。

追加記事編者の人物像については、代官パーヴェルについての高みに立ったような語り口から見て、ムスチスラフ公自身と同定する説もあるが[Приселков 1996: С. 84][Лихачев 1947: С.180]、これだけの緻密な作業を政治的指導者に帰するのは無理があるのではないか。しかし、いずれにせよ、ムスチスラフ公に近い人物であることは疑いない。追加記事の相当部分を占める引用からも分かるように、編者はビザンティンの歴史書⁶⁾や旧約書注解に精通しており、特に、天使の援助について関心が深い人物である。このことから見て、シャフマトフは、モノマフ一族、とくにムスチスラフ公に近い修道士かムスチスラフ公の家族の聴罪司祭のような人物ではないかと推定している[Шахматов 2003: С. 551-554]。このことは、1111年のポロヴェツ討伐遠征の記事の最後が、「永遠に今も代々に神の栄光あれ、アーメン」(на славу Богу, всегда и ныня и присно во веки, аминь)という祈祷の定型句で結ばれていることから見ても、首肯できるのではないだろうか。

4. 本連載の翻訳と注釈について

『イパーチイ年代記』はその史料としての重要性もあって、これまで何度も写本を校訂した刊本が公刊されている。まず、1843年に「ロシア年代全集」の第2巻として出版され[ПСРЛ Т.2, 1843]、1871年にはその補訂として新たにテキストが起こされている[Летопись 1871]。そして、1908年に、А・シャフマトフによって、「ロシア年代記全集」第2巻の第2版というかたちで、言語学的研究に配慮した転記法による刊本が出版されている[ПСРЛ Т.2, 1908]。その後、1923年に「年代記全集」の第3版、1962年に第4版、1998年に第5版と版を重ねているが、校訂テキストそのものは、すべて1908年の第2版のものをそのまま用いており、第2版がもっとも信頼できるテキストとして評価されていることがわかる⁷⁾。

6) ロシアの暦法では定着しなかった、ビザンティンに特徴的なインディクト(индикт)という記年法をここで2回用いている。

7) 『イパーチイ年代記』の刊本については、インターネット・サイト "Полное собрание русских летописей" に書誌と簡単な解説があり、テキストをダウンロードすることもできる (http://psrl.csu.ru/toms/Tom_02.shtml)。なお、年代記研究のサイトは、近年飛躍的に充実しており、ИЗБОРНИКのサイトでは、1908年版の刊本を復刻したテキストを見ることが出来る(ЛІТОПИС РУСЬКИЙ за Іпатівським списком [видання 1908 року] <http://litopys.org.ua/ipatlet/ipat.htm>)。また、"Манускрипты" プロジェクトでは、イパーチイ写本の枚葉に対応したキリル文字転記のテキストを読むことができる (http://manuscripts.ru/mns/main?p_text=32151080)。

以上のことから、本連載の翻訳では、シャフマトフ校訂による「ロシア年代記全集」第2版(1908年)のテキストを底本として用いることにした。しかしながら、このテキストは写本に忠実な転記法によっており、略記された語の解釈が難しい部分もある。そこで、翻訳作業では確認のために、1871年の刊本をもとに活字を組み直した、リャザンで刊行された「ロシア年代記」シリーズの中の『イパーチイ年代記』の刊本[Русские летописи Т.11]をあわせて参照した。同時に、参考文献に示したような『原初年代記』『キエフ年代記集成』『ガーリチ・ヴォルニニ年代記』の各国語訳を適宜参照した。

本連載稿の主な目的は、キエフ・ルーシ時代の政治史・文化史の基礎史料である『イパーチイ年代記』の『原初年代記』以降の部分の翻訳して、本邦での史料にもとづいた歴史研究に役立てることにある⁸⁾。そのために、翻訳と注釈については、次のような方針でのぞむことにした。

① 人名、地名、民族名などの固有名詞については、諸公や地名の通用名をのぞいて、訳語のあとに原語を付した。リューリク王朝の諸公名は同定しやすいように、『原初年代記』(名古屋大学出版、1987年)の方針にならって、すべての諸公名に参照番号を付した([ロシア原初年代記:564-575頁],[リューリク王朝系図索引]参照)。地名、教会・修道院名、民族名などは、同定できるよう、参考文献で示した諸注釈や参考書を持ちいて、できるかぎり注記を試みた。同定が難しいものについては、有力な説を紹介した。

② 同じ時代を扱っている、『ラヴレンチイ年代記(スーズダリ年代記)』、『ノヴゴロド第一年代記』など諸年代記における、同事件についての並行記事、外国の史料も参照し、異同がある場合には指摘するようつとめた。

③ 年代記の断片的な記事の背景を理解するために、ロシア通史の筆者たち(N・タティーシチェフ、N・カラムジン、S・ソロヴィヨフ、M・フルシチェフスキなど)や現代の歴史研究者たちが、当該の記事をどのように解釈しているかについて、主な説を紹介するようつとめた。

④ 年代記記事の著者や編者の立場を明らかにするために、『イパーチイ年代記』の編集史、年代記の文献学の研究にも配慮するようつとめた。

8)「キエフ年代記」「ガーリチ・ヴォルニニ年代記」にはすでに邦訳が存在する。除村吉太郎訳『ロシア年代記』(弘文堂書房、1943年:第3版、1946年)がそれで、1936年にACADEMIA出版から刊行されたV・パノーフによる『イパーチイ年代記』の現代ロシア語訳と注釈[Древнерусские летописи, 1936]を除村氏がそのまま訳出したものであるが、底本そのものが抄訳であり、注釈も少なく、記事に西暦年が表示されていないなど使い難く、現在の研究ではこれに言及されることはほとんどない。邦訳もまた、底本を無批判に踏襲しており、年代記原典への参照も全くなく、翻訳も間違いが多ことから、そのまま史料として用いることはできないのが現状である。ちなみに、この除村訳はユーラシア叢書30『ロシア年代記』(原書房、1979年)として復刻出版されている。

翻訳と注釈

6618 [1110] 年

(…) これは預言者ダヴィデが「主はあなたのために御使いに命じて、あなたを守らせてくれる」¹⁾ と言ったとおりである。

また、賢者エピファニーイはこう言っている。「いかなる被造物であれ、天使はその者の前に出現する。それは、雲の天使、霧の天使、雪の天使、雹の天使、寒気の天使、声の天使、雷の天使、酷寒と熱暑の天使、秋と春と夏の天使などであり、かれらは、地上で魂を持つあらゆる者に対して、地下に秘められた深淵にいる者に対して、闇の地獄の中の者に対して、深淵の上にいるすべての者に対して、かつては地上よりも高いところにいたが、墮落して闇と夕方と夜、光と昼を生じた者に対して、出現するのである」²⁾。

かくして、いかなる被造物であれ、天使はその者の前に出現する。同様にまた、いかなる地であれ、かりにそれが異教徒の地であっても、そこを守るために天使は出現する。もし、神がいずれかの地に怒りを発したときには、天使に命じてその地に戦争を起こさせ、その地の天使は神の命令に逆らうことができない。このようなことは過去に起こった。神はわれらの罪ゆえに、異族の異教徒どもがわれらに攻め入るように仕向け、神の命令によって異教徒どもはわれらを打ち破ったではないか。

もし、異教徒には天使などいないと言う者があれば、マケドニアのアレクサンドロス [大王] の言葉を聴くがよい³⁾。大王は [皇帝] ダリウスを攻めるために遠征を行い、東から西にいたる全土を征服し、エジプトの地を破壊し、アラムの地を蹂躪し、大海の島々にまで達した。そして、エルサレムを遠く望んで、ユダヤ人を打ち破ることを期した。なぜなら、ユダヤ人はダリウス帝と同盟していたからである。こうして、大王は全軍を率いて進軍し、あるところで宿営し、休息した。夜が来た。大王がその幕営の寝台に横たわっていたとき、ふと目を開くと、上の方に一人の男が立っていた。その手には抜き身の剣が握られていた。その刃はあたかも稲妻のようであった。男は大王の頭に向かってその剣を一振りした。吃驚した大王は「わしを殺すな」と叫んだ。すると、天使は大王に言った。「そなたが諸国の王、あまたの民を征服でき

1) 『詩篇』 90:11 (邦訳 91:11) からの引用。

2) この賢者エピファニウス・サラミスは、4世紀のキプロス島出身の主教で、オリゲネス派を論駁した著書などで有名な教父である。この部分の引用は、ルーシでは翻訳で広まっていた『ギリシア・ローマ年代記』 (Летописец Еллинского и Римского) の冒頭に掲げられている句であり、追加記事編者もそこから採ったと考えられる [Творогов 1997: С. 522]。

3) これ以下、アレクサンドロス大王がペルシア皇帝ダリウス三世討伐遠征のときに、天使に導かれた物語は、中世ロシアで翻訳で普及した『アレクサンドロス物語』 (Александрия) から採られたと考えられる。

るよう、神がわたしを遣わしたのだ。これまでわたしは、そなたの前を歩いて、手を差し伸べてきた。しかし、今となっては、そなたの命数は尽きた。なぜなら、そなたはエルサレムに攻め入って、神の祭司たちと神の民に悪をなそうといるのだから」。これに答えて大王は言った。「お願いします、主よ、どうかこの神の僕の罪をお赦し下さい。もし御心に適わぬのなら、故郷へ戻ります」。すると天使は言った。「恐れるな。エルサレムへの行軍を続けるがよい。かのエルサレムで、そなたはわしと同じ姿形の男を見るだろう。そのときには、ただちに平伏して、その男を拝礼せよ。そして、命じられたことをすべて行え。その指示に違反してはならない。もし違反することがあれば、その日のうちに命を落とすであろう」。

大王は立ち上がり、エルサレムへと軍を進めた。そして、到着すると、祭司たちにこう訊いた。「わしは、ダリウス帝を攻撃すべきであろうか」。大王は預言者ダニエルの書を見せられ、こう教えられた。「そなたは雄山羊であり、かの皇帝は雌羊である。そなたは、かれの帝国を破壊し、征服するであろう」⁴⁾。これは、天使がアレクサンドロス大王を導いたということではないのか。異教徒であるかれが勝利した、偶像崇拜のギリシア人たちが勝利したということではないのか。このように、われらが罪ゆえに、これらの異教徒たちが勝手に振舞ってもゆるされていたである。

しかし、次のことを知るがよい。キリスト教徒には〔異教徒の場合のように〕ひとりだけの天使がついているのではない。洗礼を受けた者の数だけの天使がついているのである。われらが篤信なる諸公の場合には、その天使の数はさらに多い。それらの天使は神の命令に逆らうことができず、キリスト教の民のために、神に向かって熱心に祈っているのである。これは、実際に起こったことである。神は、神聖なる聖母、神聖なる天使たちの祈りを聞き届けて、慈しみを示し、異教徒に対するルーシ諸公を援助するために、天使たちを派遣したのである。これは、神がモーゼに「わたしはあなたの前に使いを遣わす」⁵⁾と言ったとおりである⁶⁾。先に言っ

4) このエピソードは旧約『ダニエル記』8:20-21から採られている [Творогов 1997: C. 522]。ただし、旧約書では、預言者ダニエルが見た幻視について、天使ガブリエルが「お前の見た二本の角のある雄羊はメディアとペルシアの王である。また、あの毛深い雄山羊はギリシアの王である」と夢解きをしている。引用者はペルシアとギリシアの対応をダリウス三世とアレクサンドロス大王に当てはめてこの部分を用いたことは明らかである。実際、『ダニエル記』8:7では「みるみるうちに雄山羊は雌羊に近づき、怒りに燃えてこれを打ち倒し、その二本の角を折った」と、雄山羊が雌羊に勝つことになっている。

5) 旧約『出エジプト記』23:20からの引用。

6) ここまでが、『原初年代記』1110年の記事に対する、追加記事編者による補筆である。ここに見る天使の援助についての強い関心は、1111年のボロヴェツ討伐遠征の記事につづく長大な天使論に対応している。

たとおり、しるしは、この〔66〕18年末である2月11日にあらわれた⁷⁾。

6619〔1111年〕

神はウラジーミル[D1]の心に想を与え、かれは自分の従兄弟スヴァトボルク[B3]にこれについて語り始め、スヴァトボルク[B3]に異教徒どもを春に攻めるよう仕向けた。スヴァトボルク[B3]はこのウラジーミル[D1]の言葉を自分の従士たちに伝えた。〔するとスヴァトボルクの〕従士たちは言った。「今はそのときではありません。平民(スメルド)から耕作をとりあげ、かれらを害してしまうでしょう」

そこで、スヴァトボルク[B3]はウラジーミル[D1]に使者を遣り、こう言うように命じた。「わたしたちは会合して、従士たちとともに協議すべきでありましょう」。使者たちはウラジーミル[D1]のもとにやって来て、スヴァトボルク[B3]が言ったことをすべて伝えた。

ウラジーミル[D1]はやって来て、ドロブスクで会見がおこなわれた。スヴァトボルク[B3]は自分の従士たちとともにひとつの天幕に陣取り、ウラジーミル[D1]は自分の従士たちとともにいた。

しばらくの沈黙ののちに、ウラジーミル[D1]は言った。「兄弟よ、そなたが長上です。われらがどのようにルーシの地を守るべきか、先に言ってください」。

スヴァトボルク[B3]は言った。「兄弟よ、そなたから始めなさい」。

そこでウラジーミル[D1]は言った。「もしわたしが話を始めるならば、そなたの従士たちは、『かの〔ウラジーミル[D1]公は〕平民を害し、耕作を台無しにしようとしている』と反論することでしょう。兄弟よ、しかし、わたしには不思議でなりません。そなたたちは、平民とその馬を惜しんでいるが、つぎの事には思い至らないのですか。春になって平民が馬で耕作を始めたところで、ポロヴェツ人たちがやってきて平民たちを矢で射て、馬と女子供を掠奪し、穀物小屋を焼き払うことを。なぜ、そのことを思い至らないのですか」

〔ウラジーミル[D1]の〕従士たちは声を揃えていった。「そのとおりです。まさに、そのとおりです」

スヴァトボルク[B3]は言った。「それならば、兄弟よ、わたしはそなたと出陣しようではないか」。

そして、ふたりは、ダヴィド・スヴァトスラヴィチ[C3]に使者を遣って、自分たちとともに出撃するよう命じた。ウラジーミル[D1]とスヴァトボルク[B3]は立ち上がると、別れの挨拶

7) 「先に言ったとおり」とは、6618年の記事が、キエフの洞窟(ペチェルスキイ)修道院で目撃された「火の柱=天使」の出現の奇蹟について語っていることを指している。なお、6618年2月11日は三月に年が改まる方式で西暦換算すると、1111年2月11日に相当する。

掬を交わした⁸⁾。

そして、スヴァトボルク [B3] は息子のヤロスラフ [B32] を連れて、ウラジーミル [D1] は息子たちを連れて、ダヴィド [C3] は息子をつれて、ポロヴェツ人討伐に出撃した⁹⁾。

かれらは神とそのいと清き母、その聖なる天使たちに願いをかけて出発した。

遠征に出たのは大斎の第2日曜日¹⁰⁾、その金曜日にはすでにスーラ (Сула) 河畔にいた。土曜日にはホロル (Хорол) 河畔に到達し、そこで橈を降りた¹¹⁾。〔翌日の〕日曜日¹²⁾ に、十字架に接吻して、プスヨール (Псел) 川まで〔徒歩で〕行軍し、そこからゴルタ川まで到達した。そして、その場所で、兵士たちの到着を待って、そこからヴォルスクラ (Върьскла) 川まで移動し、翌日の水曜日、そこで、十字架に接吻し、おのれのすべての希望を十字架にゆだね、多くの涙を流

8) 『イパーチイ年代記』の1111年の記事の冒頭「神はウラジーミルの心に想を与え…」からここまでは、ラヴレンチイ系列、イパーチイ系列を問わず『原初年代記』の6611 (1103) 年にある記事の冒頭部分とはほぼ完全にダブっており、諸公会議の場所が「ドロブスク (Долобск)」であることも同じである [ロシア原初年代記: 299-300 頁]。このダブリがみられる、〈ウラジーミル・モノマフのポロヴェツ討伐の提案 ⇒ 諸公会議 ⇒ スヴァトボルク大公の従士団の躊躇とウラジーミル側の反論 ⇒ スヴァトボルク大公自らの遠征の決定〉、の一連のエピソードは、1103年のほうの記事が史実に対応しており、『イパーチイ年代記』1111年のこの部分は、追加記事編者の誤引用、もしくは先行記事の再使用と見るのが通説になっている。

もしそうであるなら、これ以降の記事にある1111年2月～3月のポロヴェツ討伐遠征の前に諸公会議が行われたかどうかの問題になる。シャフマトフの説に拠れば、『原初年代記』第2版の編者 (シルヴェストル) がまず、ネストル (第1版の編者) が書いた1103年の記事を、モノマフが主導権をとった1111年の諸公会議の再現として書き替え、さらに追加記事編者 (第3版の編者) がシルヴェストルの記事を下敷きにして、1111年の諸公会議の記事を書いたとしている。リハチョフはこの説をいたずらに複雑すぎるとして退けているが、追加記事編者が1103年の諸公会議の記事を再使用したことから見て、1111年にも会議が行われた可能性は否定できないと述べている [Лихачев 1950: С. 473-475]。

9) 以下、1111年2月～3月のルーシ諸公のドン川へのポロヴェツ討伐の遠征と、サリニツァの戦いについての記事が続く。これについては、『ラヴレンチイ年代記』の6620年 (超3月式暦法のため) の項にはるかに簡略な並行記事がある。ただし、遠征に参加した諸公については並行記事のほうが詳しく、「ウラジーミルの息子」については、スヴァトスラフ [D13]、ヤロボルク [D15]、ムスチスラフ [D11] の3人が参加したことが、「ダヴィドの息子」についても、これがロスチスラフ [C33] であることが記されている。

さらに興味深いのは、並行記事にはフセヴォロド・オリゴヴィチ [C41] とダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] も参加していたとあるにもかかわらず、本追加記事には、この2人の公についての言及がないことである。

10) 1111年 (3月式暦法では6618年になるが) の大斎の第2日曜日は2月26日に相当する。

11) ウラジーミル・モノマフの一行は2月26日に所領のペレヤスラヴリを出陣して、6日かけてホロル (Хорол) 川河畔まで到達している。1日あたり約22km行程の行軍である。ここで寒気が緩み、橈が使えない状態になったのだろう、これ以降は徒歩による行軍になる。

12) 1111年3月5日に相当する。

した。そして、大斎第6日曜日¹³⁾にそこから沢山の川を渡り、その週の火曜日¹⁴⁾にドン(Дон)川¹⁵⁾に到達した。そして、装甲を身に付けると、隊列を組んで、シャルカニ(Шарукань)¹⁶⁾の城砦へと向かっていった。

ウラジーミル[D1]公は、戦士たちの先頭を歩んでいる司祭たちに対して、尊き十字架に捧げるトロパリとコンダク、および、聖母のカノンを朗唱するように命じた。そして、夕方に城砦に近づいていった¹⁷⁾。

日曜日¹⁸⁾に、城砦から人々が出てきて、ルーシの公たちに拝礼を行い、魚と酒を献上した。

13) 3本の写本とも「大斎第6日曜日」(в 6 неделю поста)となっているが、この暦は以下に続く行程の記述と整合しない。おそらくここは「第4日曜日」の間違いではないだろうか。この不整合について、A. チェルノフは写字生の羊皮紙の取り違いから生じた前後関係の混乱が原因としているが[Комментарии 2012: С. 374-377]、数字の誤記(スラブ語式の数字表記は1文字のみ)と考えたほうがはるかに簡単に解釈ができる。「ヴォスクレセンスカヤ年代記」(Воскресенская летопись)の該当部分は6が5になっているが[Лихачев 1950: С. 475]、このような数字の誤写が写本成立の早い段階で起こったのではないか。かりに6を4に訂正した場合、この日は3月12日に相当する。

14) 上注の訂正を加えた場合、1111年3月14日に相当する。

15) この「ドン川」は立地からみて、現在の河川名では北ドネツ川(Северный Донец)のことを指している。

16) 「シャルカニ」(Шарукань)はポロヴェツの首長(ハン)の名からとった城砦名と考えられ、首長の交代によって変更される可能性があった。『ラヴレンチイ年代記』6620年の並行記事にある「オセネフ」(Осенеф)の城砦の名も、同じ城砦がこのような事情(Асан(=Осень)という首長名が年代記に見える)で改名されたことによるのではないか。この城砦は、大ざっぱには北ドネツ川流域にあったが、具体的な所在地については諸説あり特定されていない。[Лихачев 1950: С. 475]

17) 司祭たちを先頭に立てての「尊き十字架に捧げるトロパリとコンダク、および、聖母のカノンを朗唱する」この行動は、1111年3月18日の土曜日に行われたと推定される。

この日は大斎の第5週目の土曜日にあたり、正教では「聖母称賛」(Похвала Пресвятой Богородицы)の祭日である。この祭日は、アヴァール人(626年)、ベルシャ人(677年)、アラブ人(717年)など異族による度重なるコンスタンティノポリス襲来を、聖母の守護によって撃退したことを記念して、9世紀にビザンティン正教会で制定されたもので、儀式ではこの主題の聖母讃歌(アカフスト)が唱われる。この祭儀は当初はコンスタンティノポリスのヴラケルナイ教会だけで伝えられてきたが、のちにストゥディオス修道院の修道院規則に含み込まれ、これを機に正教世界に広まった。12世紀当時にはルーシにはすでにの正教会にも導入されていたと考えるべきだろう。

ルーシの諸公にとっては、この異族討伐をテーマとする祭儀は、絶好の「戦力」となると考えられたにちがいない。

18) 上記の訂正後は、1111年3月19日に相当する、上注の「聖母称賛」の祭日の翌日になる。これを3月26日の受難週間第1日曜日(いわゆる柳の日曜日(Вербное воскресенье))とするのは[Комментарии 2012: С. 377]解釈が複雑すぎるだろう。

〔ルーシ勢は〕その場所で一夜を明かした¹⁹⁾。翌日の水曜日²⁰⁾に、かれらはスグロフ(Сугров)²¹⁾に向けて進軍し、突破すると、城砦を焼き払った。木曜日には移動してドン川を離れた。すると、翌日の金曜日、3月24日にポロヴェツ人たちが集まり、隊列を組んで、戦闘に打って出た。

われらが公たちは神に希望をゆだねて、こう言った。「ここがわれらの死地である、心を固めよう」。こうして、互いに別れの挨拶を交わし、目を天に向けると、至高の神に呼びかけた。

さて、両軍が遭遇して、猛烈な戦いが展開された。至高なる神は、怒りに満ちた眼差しを、異族どもに向けた。異族どもはキリスト教徒の目の前で斃れた。こうして、異族どもは撃ち破られた。おびただしい数のわれらの敵ども、敵対者どもが、ルーシの公と兵士たちの目の前で、デゲイ(Дегей)川の水に溺れて命を落とした。神はルーシの公たちを助けたのである。公たちは、その日に神に賛美を捧げた。そして、翌日、土曜日がやってくると、みなはラザロの復活と受胎告知の祭日を祝った²²⁾。そして、神に賛美を捧げると、土曜日を過ごし、日曜日がかかるのを待った。

そして、受難週間の月曜日²³⁾に、再び異族どもが、おびただしい数の隊列をなして集まり、あたかも何万何千の巨大な森のごとくに移動してきた。そして、ルーシの部隊を取り囲んだ。

主なる神は、ルーシの公たちを助けるために天使を遣わした。ポロヴェツ人の部隊とルーシの部隊が前進して遭遇し、最初の一戦が交わされたとき、あたかも雷鳴のごとき大音声が鳴り渡った。猛烈な戦いが両者のあいだで展開され、双方の兵士たちが斃れた。ウラジーミル[D1]もみずからの部隊を率いて進軍を始め、ダヴィド[C3]もそれに続いた。それを見たポロヴェツ人たちは敗走に転じた。ポロヴェツ人たちはウラジーミル[D1]の部隊の目の前で、見えない天使に撃たれて斃れた。そのことは多くの者が目撃していた。何者か見えない者に斬られた

19) 籠城側の代表が城門から出て、包囲軍の首領に対して籠城側の代表が拝礼する(поклониться)のは、降伏の意志を示す「和平儀礼」であり、1116年の記事では、ミンスクに籠城したグレーブ公[L5]がモノマフに対して行っている。ルーシ諸公の内争の場合には、住民は十字架をかかげるのが通常だが、ポロヴェツ側はその代わりに「魚と酒を献上」したのではないだろうか。この儀礼によって無条件降伏が確認されたために、ルーシ勢はシャルカニ城砦を破壊することなく、城内に入って「一夜を明かした」のである。反対に、つぎのスグロフ(Сугров)城砦ではこのような降伏儀礼がなされなかったために、城砦は「焼き払」われたと考えられる。

20) 訂正後は、1111年3月22日に相当する。

21) 「スグロフ」(Сугров)の城砦は、『原初年代記』に記されている1107年のルビンの戦いで諸公が捕虜にとったポロヴェツの首長スグル(Сугров)の本拠地と考えられる。所在地についてはやはり諸説あり、定まっていない。[Лихачев 1950: С. 475]

22) この年、1111年3月25日(土曜日)は定期祭日である「受胎告知祭」とすると同時に、移動祭日である「ラザロの土曜日」(大斎第6週の土曜日)が一致している。

23) この年(1111年)の受難週間の月曜日は、3月27日に相当する。これは、以下の年代記そのものの記述にも対応している。

首が飛んで地面に落ちた²⁴⁾。

こうして、受難週間の月曜日、すなわち3月27日に〔ルーシ勢は〕ポロヴェツ人を撃ち破った。多くの異族どもはサリニツァ (Салница) 川²⁵⁾ で戦死した。

神は自分たちの人々を救った。スヴァトポルク [B3], ウラジーミル [D1], ダヴィド [C3] は、異教徒に対する勝利を贈与してくれた神を賛美し、多くの捕虜、家畜、馬、羊を略取した。多くの捕虜たちを手でつかみ取った。そして、捕虜たちに訊ねてこう言った。「これはどうして起こったのか。おまえたちはたいへん強力で、たいへん多勢であったのに、抗することができず、たちまち敗走してしまったではないか」。これは、神がキリスト教徒を助けるべく遣った天使のみが出来ることであった。これは、天使がウラジーミル [D1]・モノマフに、おのれの兄弟たち、ルーシの公たちを糾合して、異族どもを撃つという想を与えたのである。

すでに述べたように、これは、われわれがペチェルスキ修道院で幻視を見たのであった。火の柱が宝座の上に立ち、その後、中堂に移動すると、そこからゴロデツ (Городць) に向かって行ったのだった。その場所のラドスイニ (Радосынь) にはウラジーミル [D1] がいた。まさに、その時に、天使がウラジーミル [D1] の心に想を与え、〔ウラジーミル [D1] は〕上述したように、〔諸公に遠征を〕呼びかけたのである。

それゆえに、金口ヨハネが言ったように、天使たちを称賛しなければならない。なぜなら、天使たちは、主が人々に対して慈しみ深く、温順であることを願って、創造主を永遠に賛美しているからである。わたしの考えでは、なぜならまた、われらの守り手である天使たちは、われらが敵の軍隊と戦うときには、その天使の指揮官は大天使ミハイルなのだから。なぜならまた、ミハイルはモーセの遺骸をまもって悪魔 (ディヤヴォル) と戦い、人間の自由のためにペルシアの王を攻撃を仕掛けたのだから²⁶⁾。神はすべての被造物を分けて、諸国民の長上たる民を任命したときに、命令を下して、このペルシア人に対しては、自分たちの権力者をないがしろにすることを許した。他方、神は割礼をした人々にはミハイルを崇敬することを命じた。神はかれらの境界線を、怒りをもって引いたが、それは罪深い憤怒によるものではなく、曰く言いがたい神の言葉によるものであった。さて、このペルシア人の権力者は、ユダヤ人を隷属させて、ペルシャ人のために働かせた。このミハイルは、ユダヤ人を解放するように努めて、神

24) この段落に記されている天使の助けによる勝利は、追加記事編者が好む主題であり、この部分が、他の資料からの引用ではなく、かれの手になっていることは疑いない。

25) このサリニツァ (Салница) 川での合戦がルーシ側に決定的な勝利をもたらしたことから、この1111年2月~3月のルーシ諸公のポロヴェツ討伐の遠征と戦いを、通常は「サリニツァの戦い」「サリニツァの遠征」と呼んでいる。

26) ミハイルと悪魔の戦いについては、ルーシで翻訳されていた外典文書「モーセの臨終」(Кончина Моисеев) に触れられており、この作品が出典である可能性が高い [Творогов 1997: С. 522]。

に向かって熱心に祈りを捧げ、声を張りあげて言った。「主よ、全能者よ、あなたは、70年ものあいだエルサレムとユダヤの諸都市に背を向けてこられました。いつになったらわれらに慈しみを示されるのですか」。

また、ダニエルはその幻視の中で空を飛ぶ〔ミハイルを〕見た。その顔はあたかも稲妻のようであり、その目はあたかもロウソクのごとくであり、その腕と脚はあたかも輝く赤銅のごとくであり、その声は大群衆の声のごとくであった²⁷⁾。

また、そのような天使の中には、ろばをつかってバラムのけがれた呪術を斥けた者がいる²⁸⁾。天使の中にはヨシュアの前で剣を抜き、それによってかれに敵を倒す力を与えた者がいる²⁹⁾。天使の中には一日で18万のシリア人を撃ち殺し、野蛮人どもの夢を消滅させた者がいる。天使の中には預言者ハバククを空中に飛行させて、獅子のあいだに身を置くダニエルに食料を届けさせた者がいる³⁰⁾。このような天使たちが、敵どもに打ち勝つのである。

神に似た〔天使〕ラファイルもまた同様である。かれは一匹の魚から脂身を切り取って、悪鬼に憑かれた乙女を癒し、盲目の老人に陽の光を見させた³¹⁾。我らのいのちを守る者たちは、大いなる尊崇を受けるにふさわしいであろう。

しかし、民族の守り手になることを命じられているのは、天使だけではない。聖書に言う。「至上の神が諸民族を分け、アダムの末裔たるかれらを離散させたとき、神の天使の数にしたがって諸民族の居住地のあいだに境界線を設けた」。こうして、篤信の者が誰であれ天使が割り当てられているのである。なぜなら、ロデという女中が使徒たちに向かって、ヘロデ王の手から救い出された「ペトロが門の前に立っている」と告げたとき、人々はこれを信用せず、かの女に「それはペトロをまもる天使だろう」と答えたのも、これを示している³²⁾。

このことについては、主もまた証言している。「なんじらつつしみて、この小さき者の一人をも侮るな。かれらの天使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり」³³⁾。

さらにまた、〔神学者〕ヨハネが証言しているように、キリストはそれぞれの教会に〔守護〕

27) 旧約『ダニエル書』10:6。

28) 旧約『民数記』22章に、ベオルの子バラムが、イスラエルの民に呪いをかけて追いだすためにロバに乗って出かけたとき、剣を手にした天使（御使い）が出現してこれを妨害し、ロバに言葉を喋らせて、バラムの目を開いたというエピソードがある。

29) 旧約『ヨシュア記』5:13。

30) 旧約『ダニエル書』6:16-22。

31) 旧約統編の『トビト記』の第6章には、天使ラファエルが魚の内臓は悪霊を追い払い、胆のうは目を良くすると教えるエピソードがある。

32) 新約『使徒行伝』12:12-17の、使徒ペトロがヘロデ王の牢獄から天使の手によって救い出されたエピソードがふまえられている。

33) 新約『マタイ伝』18:10

天使を割り当てている。「スミルナにある教会の天使に書き送れ(…)『われ汝の艱難と貧窮を知る、されど汝は富める者なり』」³⁴⁾

これらは、われらを愛し、主宰の前でわれらのために祈ってくれる天使たちにとっては周知のことである。なぜなら、天使たちは、仕える霊なのだから。これについては使徒〔パウロ〕が「救いを継がんとする者のために、務めを執るべく遣わされた者なり」³⁵⁾と言っている。救いを求める者にとって天使たちは守り手、助け手である。これはあたかも、そなたがいま、ダニエルについて、かれが大天使ミハイルを、われらの解放のために、怒りのときに、ペルシアに伴った話で聞いているとおりでである。言われているように、ダニエルが虜囚たちを解放しようと努めていたときに、ミハイルがペルシア人を屈服せしめたのである。ミハイルはまた敵に打ち克つことで、ユダヤ人たちがユーフラテス川を渡って、父祖の地を回復し、城市や会堂を建てることができた。さらに、大エピファニオスは語っている。「それぞれの民族に天使は割り当てられている」と。また、ダニエルについての聖典では「ギリシアの支配者に天使が命じられ、ユダヤの支配者としてミハイルが命じられた」とある。また、「天使の数によって法が定められた」とされている³⁶⁾。

さらに、ヒュッポリトス³⁷⁾は、ダニエルを解釈して言っている。「ベルシャツアル王の治世第3年に、わたしダニエルは、3週間泣き暮らし、最初の月の終わりにいたって心が落ち着いた。その21日のあいだ神に祈って、啓示の秘密を明かすよう願った。すると、父なる神がその言葉を下したのを聴いた。それはどのように運命が定められているかであった。大きな川があり、そこは罪からまぬかれるために身を置かねばならぬところだった。わたしは、目を上げるとそこに、緋衣をまとった男を見た。一見して、そのかたちはあたかも飛んでいる天使ガヴリエルに見えたが、ここではそうではなく、主ご自身の尊顔であり、人間の顔ではなかった。しかし、外見からはあたかも人間のごとくであり、それは、こう書かれているようだった。『この男はだんだらを来ている。脚は純金がまかれ、その胴はトパーズのごとく、顔は稲妻のごとく、目は蠟燭のごとく燃え、腕と肩は純銅のごとく、その声は大群衆が語っているがごとし』。わたしは地にひれ伏した。するとまるで人間の手のようなものがわたしを持ち上げると、膝の上に置いてこう言った『ダニエルよ、おそれるな、なんのためにわたしがそなたのところに来

34) 新約『黙示録』2:8-9

35) 新約『ヘブル人への書簡』1:14

36) このパラグラフの冒頭「それゆえに、金口ヨハネが言ったように、天使たちを称賛しなければならない」からここまでの非常に長い天使論は、追加記事編者がビザンティンの歴史書のスラブ語訳「ハルマトロス年代誌」(Хроника Анматол)から引用したもの〔Творогов 1997: C. 522〕。

37) ヒュッポリトス(Ипполит)は2世紀後半～3世紀前半のローマの対立教皇で聖人。その旧約『ダニエル書』の注釈はギリシア語、スラブ語に訳され、ルーシでも読まれていた。

たか、知っているか。ペルシアの王と戦いを始めるためである。そなたに教えよう。真実の聖典には記されている。これについては、そなたの王ミハイルをのぞいては、わたしと論争できるものはない。なぜなら、わたしがかのミハイルをここに配したのであり、その日から、わたしはそなたの神の前では祈るようになった。そなたの祈りを聞いて、わたしはペルシアの王と戦うべく派遣されてきたのである。かれへのなんらかの助言がある。人々を立ち去らせないよう。まもなく、そなたの願いがかなうであろう。わたしは、かれに対抗して、ここに、おまえたちの王であるミハイルを残したのである』。さて、このミハイルとは、人々のもとに配された天使以外の何ものでもない³⁸⁾。これについては、神はモーセにこう言っている。「わたしは、おまえたちの間であって上ることはしない、なぜなら、おまえたちは頑なな民であるから（…）しかし、わが天使がおまえたちと一緒に上るであろう³⁹⁾。

こうして、いま聖母と聖なる天使たちの祈りによって神の助けを得て、ルーシの公たちは自分たちの臣民のもとに、栄光に包まれて帰郷した。その栄光は、遠方の諸国へ広がり、ギリシア人、ハンガリー人、ポーランド人、チェコ人のもとに伝わり、ローマにさえも達した⁴⁰⁾。永遠に今も代々に神の栄光あれ、アーメン。

この年〔6619 (1111) 年〕の10月7日に、フセヴォロド[D]の寡婦が逝去し、聖アンドレイ〔アンデレ〕修道院に埋葬された⁴¹⁾。

この年の11月23日に、チェルニゴフの主教イオアン⁴²⁾が逝去した。

38) このヒュッポリトスの解釈は、旧約『ダニエル書』8:1-13の内容を敷衍した記述になっている。

39) 旧約『出エジプト記』33:1-3を参照。

40) このように名君の評判が諸国に広がるというモチーフは『イーゴリ軍譚』にも見え、それを利用した15世紀の『ザドンシチナ』にも発展的に表現されている。

41) フセヴォロド・ヤロスラヴィチ[D]の寡婦とは、1067-1069年の間に結婚した二番目の妻で、ロスチスラフ[D2]や、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ4世と再婚したエウプラクシアの母である。タティーシチェフによれば、フセヴォロドの最初のギリシア人の妻(モノマコス家の縁戚)は1067年に亡くなり、その後近い年にフセヴォロドと結婚したとされる。かの女はポロヴェツの出身という説もあり、フレーブニコフ写本になされた後代の書き込みから「アンナ」という名が推定されているが、詳細は不明。

42) 『ラヴレンチイ年代記』に並行記事がある。イオアンについては、『原初年代記』1088年のヴィドフイツキイのミハイル教会の献堂式(освящение)の参加者として、1091年の洞窟修道院フェオドーシイの埋葬式の参加者として名が見える。病身で、この頃から亡くなるまで病に伏せていたらしい。

6620 [1112] 年, インディクト⁴³⁾。スヴァトポルク [B3] の子ヤロスラフ⁴⁴⁾ [B32] がヤトヴァグ人⁴⁵⁾ 討伐の遠征を行い, 撃ち破った。ヤロスラフは戦争から帰還すると, ノヴゴロドに使者を遣って, ムスチスラフ・ウラジーミロヴチ [D11] の娘を嫁にとった。5月12日のことである。興入れをしたのは6月29日だった⁴⁶⁾。

この年, ウラジーミル [D1] の娘エフィーミヤがハンガリー王との結婚のために出発した⁴⁷⁾。

この年, ダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] が逝去した。5月25日だった。29日にかれの遺骸はクロフのヴラケルナ聖母教会⁴⁸⁾ に埋葬された。

この年, フセヴォロド [D] の娘でウラジーミル [D1] ・[モノマフ] [D11] の姉のヤンカが逝去した。11月3日だった。遺体は聖アンドレイ [アンデレ] 教会に埋葬された。この教会はかの

43) 「インディクト」(индикт; Ινδικτιών) とは, ビザンティンの年代記で用いられていた 15 年周期の年記単位(徴税査定周期) のことで, 『原初年代記』 にも 8 回登場している。ただし, この部分では「インディクトの何年」にあたる数字がどの写本も欠落しており, フレーブニコフ写本では Индикта の語も書かれていない。写字生が不要と判断したのだろう。ちなみに, この年はインディクト第 5 年にあたる。インディクトについては, 解説も参照。

44) ヤロスラフ [B32] は, 1100 年にキエフ大公だった父スヴァトポルク [B3] によってヴラジミルの代官に任命され, 1102 年には大公の年長の子の権利としてノヴゴロドの公座を要求したが, ノヴゴロド人の拒絶にあい, 結局モノマフの長男ムスチスラフ [D11] が公座を得た。それ以来, この時までヴォルニニのヴラジミルの公であった。ヤトヴァグ人への掠奪遠征のためにはもっとも近い立地にある。

45) ヤトヴァグ人(ятвяги) は言語的にはリトヴァと同じバルト語族に属し, 西ブグ川とネマン川上流の間の一帯に居住していた。ヴォルニニ公領の北, ポロツク公領の西に隣接しており, ルーシの諸公にとっては, 帰服していない部族のひとつだった。『原初年代記』 によれば, 983 年にウラジーミル聖公 [06] が, 1038 年にはヤロスラフ賢公 [13] がこの地に遠征をおこなっている。

46) モノマフ [D1] がキエフ大公位に就く直前, まだスヴァトポルク [B3] が存命中に結ばれたこの結婚は, ヤロスラフ [B32] の側からは, ノヴゴロド公のムスチスラフ [D11] の姻戚になることで, 一度逃したノヴゴロドの公座獲得を期待したのだろう。他方, モノマフ一族にとっては, スヴァトポルク [B3] の後に大公位がモノマフにまわる期待があったと思われる。取り決めからヴラジミルへの興入れまで時間がかかっているのは, 公女がいたノヴゴロドとヴラジミルの間が遠いことによる。なお, 『ノヴゴロド第一年代記』 でヤロスラフの遠征と結婚は 1113 年の項に記されている。しかし, 『イパーチイ年代記』 の記事は日付が詳しく前後関係に矛盾がないことから, こちらが史実に対応していると考えられるべきであろう。

47) エフィーミア(Офимья, Еуфимья) はハンガリー王カールマン 2 世(在位 1095 - 1116 年) に嫁いだが, まもなく不倫を疑われ, ルーシに帰国させられている。かの女がルーシで産んだ息子ボリスは, のちにハンガリー王位を争ったという。エフィーミア自身は 1139 年にキエフで没している。[Творогов 1997: C. 523]。

48) クロフのヴラケルナ聖母教会(церковь святых Богородица Влахерне на Клове) は, ペチェルスキイ修道院典院ステファン(1094 年没) 創建のクロフ修道院に 11 世紀の 90 年代に建てられた聖母に献堂された教会。キエフ城市の南東に位置していた。おそらく, コンスタンティノポリスのヴラケルナイ教会の聖母イコンに献堂された教会と考えられる。

女の父が創建し、かの女はこの教会で、娘のままで受戒剃髪したのだった⁴⁹⁾。

この年の末に、ペチェルスキ修道院の典院のフェオクチストが、チェルニゴフの主教に叙任された。1月12日⁵⁰⁾だった。主教座に就いたのは19日だった。これには、ダヴィド公[C3]も公妃も喜んだ。なぜなら、フェオクチストは公妃の聴罪司祭だったからである。貴族も家来たちもみな喜んだ。なぜなら、かれの前任の主教は病身で、教会での奉事ができず、25年間寝たままであったからで、それゆえ公と家来は主教の奉事がなく不満に思っていたからである。それゆえ喜んで、神を賛美した。

これが起こったとき、ペチェルスキ修道院の修道士たちは典院を失ってしまった。そこで全員が集まって典院に司祭のプロールを任命した、その旨を府主教とスヴァトボルク公[B3]に報告した。公は府主教に対して、喜んでかれを〔典院に〕叙任するよう命じた。こうして、乾酪週間の木曜日、2月9日に叙任式がなされた。それから、修道士たちは典院とともに齋に入った。

6621〔1113〕年

昼の第1時に太陽にしるしが現れた。すべての人々に見えた。太陽は残り少なくなり、あたかも月のように両方の角が下に向いていた。3月19日のことである、月は29日である⁵¹⁾。

このようなしるしは善い兆しではない。しるしは、太陽にも月にも星にもあるが、どの地でもあるのではない。ある地ではしるしがあったとき、ひとつの地ではこれが見えるが、別の地では見えないことがある。同様に、古い昔、アンティオコス〔4世〕の時代に、エルサレムにしるしがあった。空中に武器を手にした騎馬の者たちが駆け回った。武器も動いていた。しか

49) ヤンカの父フセヴォロド・ヤロスラヴィチ大公[D]が1086年(異説によれば1070年以前)に創建した使徒アンデレに奉獻された修道院。フセヴォロド公の洗礼名は〈アンドレイ〉と推定され[Литвина, Успенский 2006: C. 124-125, 507-508]。使徒アンデレはかれの守護聖人であった。

このフセヴォロドの娘ヤンカ(Янка)(これは通称で、修道名はイオアンナ(Иоанна)[Литвина, Успенский 2006: C. 124]。家庭内での呼称が年代記でも使われたか?)については、『原初年代記』イパーチイ系統写本のみ、6594(1086)年の項にフセヴォロド大公によるアンデレ修道院創建の記事があり、「ヤンカという名の彼の娘が乙女のままそこで剃髪した」という、この記事とまったく同じ文言が見える。このことから、『原初年代記』6594(1086)年のアンデレ修道院に関する記事は、第3版編集者(追加記事編者)による加筆である可能性が強い。かれは、モノマフ一族に伝えられていたフセヴォロドおよびヤンカ関係の資料をここで用いたのだろう。

50) 新年が三月から始まる創世紀元のため、これは1113年1月12日に相当する。

51) キエフ地方で1113年3月19日午前7時半ころに観察された日食のこと[スズダリ年代記訳注[I]: 13頁注10]。『ラヴレンチイ年代記』の6622年の記事でも同様の並行記事がある。「月は29である(а луны въ 29)」は年代記で時々用いられる月齢による暦の記述でだが、29の意味は不明[Данилевский 1983: C. 66]。写本によっては、ビザンティン式数字で9となっているものもある。

し、これはエルサレムだけで、他の地ではなかった⁵²⁾。

今回の太陽にあらわれたしるしはスヴァトポルク [B3] の死の予言であった。しるしのあとに復活祭がおとずれ⁵³⁾、これを祝ったが、この祭日のあとで公は病気になった。

スヴァトポルク [B3] と称した篤信なるミハイル公⁵⁴⁾ が逝去したのは、4月16日、ヴィシエゴロド郊外であった。その遺骸は船でキエフに運ばれ、船からおろされると、櫓に安置された。かれの貴族たち、従士たちは弔いの涙をながし、所定の歌を歌った。遺骸は、公みずから創建した聖ミハイル教会⁵⁵⁾ に埋葬された。公妃は多くの財物を修道院、司祭、貧者に分け与えた。このような慈くしみはこれまで誰も示したことがなかったので、万民は驚いた。

翌朝、17日にキエフの市民は協議をして、ウラジーミル [D1] のもとへ使者を遣って、こう伝えた。「公よ、父と祖父の公座に來られよ⁵⁶⁾」。これを聞いたウラジーミル [D1] は、大いに泣き出して、従兄弟を悼んで、来ようとしなかった⁵⁷⁾。キエフ市民は、千人長プチャタの屋敷

52) アンティオコス王治世のエルサレムでのしるしについては、『原初年代記』 6573 (1065) 年の項に、同様の記事が見える。双方とも出典は「ハルマトロス年代誌」だが、この部分は 1065 年の記事の再使用かもしれない。

53) この年、1113 年の復活祭は、4月6日だった。

54) ミハイル (Михаиль) はスヴァトポルクの洗礼名で複数の典拠から確認できる。かれは、ルーシ諸公の中では初めて名の日 (именина) の祝いを催すなど、キリスト教を権力儀礼に取り込んでいた。さらに研究者は、かれの名 Свято-полк が「神聖・部隊」という意味を持つことと、天軍の指揮官大天使ミハイルとの意味的・象徴的な関連を指摘している [Литвина, Успенский 2006: С.604-605]。

55) 『原初年代記』 6616 (1108) 年の記事に「7月11日にスヴァトポルク公によって金の丸屋根をもった聖ミハイルの教会が定礎された」とあり大天使ミハイルに献堂されたこの聖堂を指す。現在も修道院として観光名所のひとつとなっている。

56) この表現はすぐあとで年代記記者の言葉として繰り返されており、公座継承の理由をも語っていることから、キエフ市民代表の口から出たというより、モノマフ一族の立場を代弁する年代記記者 (追加記事編者) の言葉である可能性が高い。1097年のリューベチの諸公会議では、キエフの公座は父イジャスラフ [B] の地 (очьчина) としてスヴァトポルク [B3] に与えられることが決まり、同時に「おのおのが自分の父の地を保持する」(каждо держитъ очьчину свою) 原則が承認された。これと比べると、「父(…)の公座に來られよ」(поиди <...> на столь отень...) の言葉は、この原則の見直しであり、キエフがモノマフ一族の代々の所領地であるべきことを「使者」の口から語らせたことになる。

57) このモノマフの〈躊躇〉の理由として、ソロヴィヨフは、1093年の父フセヴォロド [D] の死後、長幼序上位のスヴァトポルク [B3] にキエフ大公位を譲ったと同様に、この時点でやはり長幼序が上にあるチェルニゴフ公ダヴィド [C3] とノヴゴロド・セヴェルスキイ公オレーグ [C4] (モノマフの父フセヴォロド [D] は二人の父スヴァトスラフ [C] の弟にあたる) に「敬意を表して」、同様の行為をとったとしている [Соловьев Кн. 1: С389-390]。

を掠奪し⁵⁸⁾、ユダヤ人のもとに押しかけて破壊し盗み出した⁵⁹⁾。キエフ市民は再びウラジーミル [D1]のもとへ使者を遣り言った。「公よ、キエフへ来られよ。もし来なければ、大いなる厄災が起こるであろう。プチャタの屋敷、百人長、ユダヤ人が破壊・掠奪を受けるにとどまらず、そなたの嫂⁶⁰⁾、そなたの貴族、修道院も襲われます。公よ、もし修道院が掠奪されるようなことになったら、その責を負うことになりますぞ」。ウラジーミル [D1]はこれを聞き届けて、キエフへと出発した。

フセヴォロドの子、ウラジーミル [D1] 公の治世のはじまり。

ウラジーミル・モノマフ [D1]は日曜日⁶¹⁾に公座に就いた。〔府主教〕ニキフォルと主教たち、すべてのキエフ市民が大いなる敬意をもってかれを迎えた。かれは父および祖父たちの公座に就くと、すべての人々は喜び、騒乱はしなくなった。

ポロヴェツ人はスヴァトポルク [B3]の死を知ると、集合して、ヴィル川⁶²⁾に向かった。ウラジーミル [D1]は自分の息子たち、甥たちを集め、ヴィル川に向かい、オレーグ [C4]と合流した⁶³⁾。ポロヴェツ人は逃げた。

この年、〔ウラジーミル [D1]〕は息子のスヴァトスラフ [D13]をペレヤスラヴリ〔の公座〕に、ヴァチェスラフ [D16]をスモレンスク〔の公座〕に就かせた⁶⁴⁾。

この年、ラザロ女子修道院の典院〔女子修道院長〕が逝去した。9月14日だった。かの女は聖人のごとく生き、修道女として60年を過ごし、92歳だった。

58) キエフ市民のスヴァトポルクの抑圧的な政治に対する反発が、かれを支えていた支配層（貴族、千人長）への掠奪のかたちをとったもの。また、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の31話ブローホルの物語にみるように、キエフ市民はスヴァトポルクの強権的な政治に大きな不満を持っていたようである [БЛДР-4: C.430-434]。

59) キエフ市民のユダヤ人襲撃（ロシア史初のボグロムとされる）の原因について、タティーシチェフ以来のロシアの学説史では、打算的なスヴァトポルク [B3]の手先となって金貸や投機に従事していたユダヤ人が、市民の恨みを買っていたと説明されることが多いが、史料的な根拠は乏しい [Петрухин 2013: C.3-10]。

60) 「嫂」は原文では ятровь で、古語では兄弟（従兄弟）の配偶者を指す。ここでは、亡くなったスヴァトポルク大公の寡婦で、コムネノス朝の皇女であったヴァルヴァラを指すと思われる。

61) 『ラヴレンチイ年代記』6622年の並行記事には「同じ月の20日ウラジーミルがキエフに入った。日曜日のことだった」とあり、1113年4月20日の日曜日であることがわかる。つまり、ウラジーミルはスヴァトスラフ死去の週の内に、すみやかにペレヤスラヴリからキエフに向かったことになる。

62) ヴィル (Выр) 川は、セイム (Сейма) 川の支流。モノマフの『教訓』(Поучение) にチエルニゴフ公領の城市としてヴィレフ (Вырев, Вырьск, Вырь) という地名がでてくるが、河岸に位置していたと思われる。早い時期に城砦としては廃されたようで、正確な所在地は不明。

63) 当時オレーグ [C4]は、セイム川に近いノヴゴロド・セヴェルスキイの公であった。

64) モノマフ自身のキエフ大公位就任にともない、それまで自身がいたペレヤスラヴリの公位に、スモレンスク公だったスヴァトスラフ [D13]を就け、その結果空いたスモレンスクの公位に弟のヴァチェスラフ [D16]を就けた。ここでは、いわば玉突き式の公座遷移が起こっている。

この年、ウラジーミル[D1]はヴォロダリー[A12]の娘を、自らの息子ロマン[D14]の嫁にとつた⁶⁵⁾。9月11日⁶⁶⁾だった。

この年、ムスチスラフ[D11]は、ノヴゴロドの商業区にある公の宮殿に、石造りの聖ニコライ教会⁶⁷⁾を定礎した。

この年、〔ウラジーミル[D1]は〕自分の息子ヤロポルク[D15]をペレヤスラヴリ〔の公座〕に就かせた⁶⁸⁾。

この年、ユーリエフにダニールが主教として叙任され、ベルゴロドにはニキータが主教として叙任された⁶⁹⁾。

6622〔1114〕年。ウラジーミル[D1]の息子スヴァトスラフ[D13]が3月16日に逝去し⁷⁰⁾、ペレヤスラヴリの聖ミハイル教会に埋葬された。父親[D1]がかれをスモレンスクから移して、ここ〔ペレヤスラヴリ〕に公座を与えたのである⁷¹⁾。

65) 当時、ロマン・ウラジーミロヴィチ[D14]はヴォルィニ地方のいずれかの城市にいた可能性が高い。ヴォロダリー・ロスチスラヴィチ[A12]はポーランド国境の城市ベレムィシェリの公で、娘もそこに住んでいただろう。この結婚の背後には、モノマフ一族がロスチスラフ[A1]一族と接近をはかり、潜在的にキエフ大公位を狙いうるヤロスラフ[B32]への対抗を確実なものとし、かつヴォルィニ地方へ勢力を拡大する意図があったのだろう。[Грушевський 1991: C. 125]

66) 1113年9月11日に相当する。

67) このノヴゴロドの聖ニコライ教会は、ノヴゴロドに現存する「ニコライ・ドゥヴォリシェンスキイ首座教会」(Николо-Дворищенский собор)のこと。

68) ヤロポルク[D15]のペレヤスラヴリ公就位は、ひとつおいた次の記事にある6622(1114)年3月16日のペレヤスラヴリ公スヴァトスラフ[D13]の死去を受けて、1114年3月末以降に父ウラジーミル・モノマフ公の指示によって行われたものと考えるのが自然である。この、記事の配列の矛盾は、編集の際に記事の配置の誤りによって起こったと考えるべきか。ただし、『ノヴゴロド第一年代記』の1114年の項にもスヴァトスラフ死去の並行記事がある。

69) 『ラヴレンチイ年代記』の6622年には「同じ年ダニールが主教に叙任された。1月6日の神現祭のことだった」と短い並行記事がある。この『ラヴレンチイ年代記』の記事は超三月暦で記されていることから[スーズダリ年代記訳注[I]: 14頁]、1114年1月6日の出来事であり、『イパーチイ年代記』のこの場所に記されていることと辻褃が合う。この『イパーチイ年代記』の内容のほうが詳しいのは、追加記事編者の加筆が加わっているからだろう。

ユーリエフはキエフ南方約80kmのロシ川河畔の城市で、1032年にヤロスラフ賢公の手で創建され、1072年には既に主教が置かれていた。キエフ北方10kmのベルゴロドもやはり古くから主教がおり、ともにキエフの付属都市の役割を果たしていた。モノマフによるこの新主教選出は、キエフ大公としての聖界における基盤固めの意味があっただろう。

70) 『ラヴレンチイ年代記』の6622(1114)年にある並行記事は、死去の日付を3月17日としており、一日ずれている。

71) 前年1113年の記事に、スヴァトスラフ[D13]がスモレンスクからペレヤスラヴリに公座を移したことが書かれている。

この年、ムスチスラフ[D11]は、ノヴゴロドで、従来よりも大規模な城壁を定礎した。

この年、ムスチスラフ公[D11]の代官パーヴェルによってラドガ⁷²⁾の盛り土の上に石造りの壁が定礎された⁷³⁾。

わたしがラドガに来たとき、ラドガの市民がここで起こったことを、こう語った。「大きな黒雲があらわれたとき、わたし等の子供たちはガラス玉⁷⁴⁾を探し始めた。それは小さいもの、大きいもの、くるくる回るものがあつた。ヴォルホフ川でも水に跳ねているものを集めていた」。わたしもその玉を百個以上集めた。みな異なつてゐた。わたしがこれを不思議がつてゐると、市民たちはわたしにこう言つた。「これは不思議ではありません。このようなことは今までもありました。年長の者たちがウグラやサモヤディに行つたことがあります。同様のことを北の国で見たのです。雲が降つてきて、その雲から小さなリスたちが落ちてきたのです。まるで生まれたてのようで、地上で大きくなつて、散らばつていったとのこと。別のときに、やはり黒雲がありました。そこからは、小さなシカたちが落ちてきて、やはり大きくなつて、散らばつていったのです。」これは、ラドガの代官パーヴェルと市民たちが証言したものである。

もし、これを信じない者があるなら、年代誌⁷⁵⁾を読むがよい。

プロフ(Прово)帝の治世に、雨が降つたとき、巨大な黒雲から大量の水滴とともに小麦が降つてきた。それを集めたところ、大きな穀倉いっぱいになつた。さらに、アヴレリアン(Аврильян)帝の治世には銀の薄片が降つてきた。また、アフリカでは巨大な石塊が三個降つてきたという⁷⁶⁾。

さらに、大洪水と諸民族の分割の後のことだが、ハムの一族のメストロム(Местром)がまず統治を始め、次いでエレミイ(Еремии)、次いでフェオスト(Феост)が統治したという。エジブ

72) ラドガ(Ладоба)はヴォルホフ川の河口に位置するノヴゴロド公領の古い城市。パーヴェルはムスチスラフ公によってそこに派遣された代官=城市の長官(посадник)である。

73) ムスチスラフ公[D11]によるノヴゴロドの城壁(原文では новьгородъ)拡張とラドガの石壁建設については、『ノヴゴロド第一年代記』の1116年の項に並行記事がある。これはノヴゴロド関連の記事であることから、1116年の可能性が高い。

74) ガラス玉(глазкы стекляныи)は、装飾品として用いられた穴の開いたガラス玉(ビーズ)で日本の「とんぼ玉」にあたる。ルーシではヴァリャグ商人の時代からの交易品のひとつで、ノヴゴロド一帯の考古学遺物として発見され、また今でもヴォルホフ川の河底を浚うと見つかることがあるという[Комментарии 2012: С. 379][Львова 2008]。

75) 「年代誌」(хронограф)とはスラブ語に翻訳されたビザンティン年代記の総称。ルーシでは様々な編集されたものが流通してゐた。

76) この段落はビザンティンの歴史書『ハルマトロス年代誌』(Хроника Арматола)から採つたもの。プロフ帝(Пров)は、ローマ皇帝、マルクス・アウレリウス・プロブス帝(在位276年-282年)、アヴレリアン(Аврильян)は、ルキウス・ドミティウス・アウレリアヌス帝(在位270年-275年)のこと。ここのアフリカ(Африки)は出典における誤記(誤訳)で、ローマ帝国の属領地トラキアを指している。

ト人はこのフェオストのことをスヴァログ(Сварог)と呼んでいた。さて、このフェオストがエジプトを統治していた、その治世で、空からやっとはさみが落ちてきて、武器の鍛造がはじまったという。それ以前は、丸木や石で武器を打っていた。

このフェオストは法律を発して、女たちはひとりの男だけに嫁ぐべきだとし、自分も〔複数の妻をもつことを〕控え、姦淫を犯した者は処罰するよう命じた。そのために、かれはスヴァログ神と呼ばれたのだった。それ以前は、女たちは、あたかも畜生のように、望む相手とつがっていた。女が子供を産むと、自分の好きな男のところに行って「これはお前の子だ」と言って、引き渡したという。男もまた儀式を行って、子供を引き取っていた。フェオストはこのような慣習を廃して、ひとりの男はひとりの女を妻とし、ひとりの女はひとりの男のもとに嫁するよう命じた。もしこの法を犯すものがあれば、かまどの火の中に投げられたのである。そのため、かれはスヴァログと呼ばれて、エジプト人に尊ばれた⁷⁷⁾。

かれの死後、ダジボグ(Дажьбог)と呼ばれた、〈太陽〉という名の息子が、7470日のあいだ統治をした。それは、20年半に相当するが、エジプト人はそのような〔日にちによる〕暦の計算法の他は知らなかったのである。ある者は月によって暦を計算し、ある者は一年の日にちによって計算している。12の月という数字は、民が皇帝に貢税を支払うようになってから知ったのである。スヴァログの子である皇帝〈太陽〉(別称ダジボグ)は強大な権力をもった人物だった。かれは、何者かから裕福で高貴なエジプト女がいて、ある男がこの女と姦淫しようとしていることを聞いて、かの女を探しだして捕まえようとした。かれは父スヴァログの法が犯されることを嫌ったのである。皇帝はわずかな手勢を引き連れ、女が姦淫している時刻を聞き出すと、夜半に女を見つけたが、男と一緒にいるところではなかった。そこで、女が好いている他の男と一緒に床入りさせた。それから、女を捕まえ、拷問にかけ、エジプト全土を引き回してさらし者にした。民衆はみなかれを称賛した。だが、これ以上話を続けるのはやめよう。ダビデ王が言っているように、「主は望まれるものを全て、天にも地にも海にもあらゆる深淵にも、作られました。地の果てから雲を揚げて」⁷⁸⁾とあるとおりです。これは、私たちが先に述べた、最後の地でした。

6623〔1115〕年。インディクト8年。ルーシの諸公が会合した。フセヴォロドの子ウラジー

77) この段落のメストロム王からフェオスト王までのエジプト王の物語は、『マララス年代誌』(Хроника Малалы) スラブ語訳の第1書23章、第2書1章、第4書4章の記述を抜粋して編集したもの。「フェオスト」(Феоост)はギリシア神話の鍛冶神ヘパイストス、〈太陽〉はヘリオス神にそれぞれ対応している。スラブ語訳では、ほぼ同様の神話的役割をもつスラブの神格、スヴァログ神(Сварог)とダジボグ神(Дажьбог)にあてて示されている。[Комментарии 2012: С. 380]

78) 『詩篇』第113章の詩句のバラフレーズ

ミル[D1]、通称モノマフとダヴィド・スヴァトスラヴィチ[C3]とその弟オレーグ[C4]である。かれらは、ボリスとグレーブの聖骸を移葬することを決めた⁷⁹⁾。なぜならば、かれらに奉献した石造りの教会が落成したため、かれらを遺体を称賛、崇敬し、埋葬するためであった。初めに諸公は石造りの教会の献堂式を行った。5月1日であった。翌日の〔5月〕2日に⁸⁰⁾二人の聖人が移された。至る所から多くの人が集まった。府主教ニキフォルとすべての主教たちだった。それはすなわち、チェルニゴフ主教フェオクチスト、ペレヤスラヴリ主教ラザリ、そしてベルゴロドの司祭⁸¹⁾ニキータ、ユーリエフのダニールであった。さらに典院たちも集まった。それはすなわち、ペテルスキ修道院典院プロホル、聖ミハイル修道院典院シリヴェストル、聖救世主修道院典院サヴァ、聖アンドレイ修道院典院グリゴリー、クロフの〔ヴラケルナ聖母修道院〕典院のピョートル他の典院たちであった。石造りの聖堂が祝聖、献堂された。聖体礼儀が歌われ、オレーグ[C4]のもとで、みなは飲み、すべては最高に調えられていた。乞食や巡礼者たちに対しても3日間食事が与えられた。

そして、その翌日〔5月2日〕に府主教、主教、典院たちは高位聖職者の祭服に身を包んで、蠟燭をともし、ふくよかな香を焚いた。〔諸公は〕聖人たちの聖棺のところにやってきて、ボリスの棺を持ち上げると、これを櫓に乗せた。そして公と貴族たちは、縄でその櫓を引いた。その前を修道女たちが蠟燭を手に進み、そのうしろを司祭、典院たちが、聖棺の直前を主教たちが進んだ。諸公はかたわらを聖棺の仕切り板の間を歩いていた。民衆があまりにも多く、櫓を引くことが難しかった。仕切り板を壊す者もいれば、城壁や塀にとりついて見る者もいた。そのようなおびただしい民衆を見るのは恐ろしいほどだった。そこで、ウラジーミル[D1]は、錦や羊毛の布地を細かく裂いて、民衆に向けて投げ与えるよう命じた。同様に、リスの毛皮や、銀貨を押しよせた群衆に投げ与えるよう命じた。こうすることで、容易に聖棺を教会内に運び込むことができ、教会の中央に安置した。次にまた、グレーブの聖棺を運ぶために出かけた。同様の方法でグレーブの聖棺も運んで来られ、兄の傍らに安置された。

それから、ウラジーミル[D1]、ダヴィド[C3]、オレーグ[C4]の言い争いがはじまった。ウラジーミル[D1]は聖棺を教会の真ん中に安置して、その上を覆う聖龕を建てることを望んだ。ダヴィド[C3]とオレーグ[C4]は、中央の円蓋の下の右手の聖人たちのために用意された「わ

79) この、公族の統合の象徴である聖ボリスと聖グレーブの「移葬」(перенести мощи)は、1072年にかれらの父の世代がおこなった、聖人たちの遺骸のヴィシェゴロドへの新しい木造教会への移葬(おそらく、1026年にヤロスラフ賢公が建立したとされるヴィシェゴロドの礼拝堂に安置されていたのだろう)の再現である。今回は同じ市内の石造りの教会に移されている。この記事の記述も、『原初年代記』6580(1072)年の記事を明らかに用いて、パラフレーズしている。

80) 1072年にかれらの親たちが行った移葬でも、5月2日に棺の安置が行われている。

81) ニキータとダニールについて、すべての写本が「司祭」(попомъ)となっているが、1113年の記事でこの二人が主教に叙任されたことが記されていることから、これは「主教」(епископом)の誤写であろう。

が父が指示した」場所に置くことを主張した。府主教と主教たちは言った。「どこが二人の殉教者にふさわしいか籤を投げなさい。そこに安置しましょう」。みなは同意した。ウラジーミル [D1] は自分の籤を置き、ダヴィド [C3] とオレーグ [C4] も自分の籤を聖なる宝座に置いた。ダヴィド [C3] とオレーグ [C4] の籤が引かれた⁸²⁾。こうして、円蓋の下の右手、現在ある場所にふたりの聖棺は安置されたのである。

こうして、5月2日に、聖なる殉教者はヴィシエゴロドにある木造教会から石造りの教会へと移し葬られた。このふたりは、われら諸公の称賛の対象であり、ルーシの地の守り手である。なぜなら、ふたりは、現世に榮譽を受けることを拒み、キリストを愛し、キリストの道を歩むことを願い、キリストの善き羊たちであったからである。ふたりは、従容として生け贄の場に引かれていき、不条理な死から逃れることはしなかった。それゆえ、ふたりはキリストとともに永遠の喜びの中に君臨しており、われらが救い主イエス・キリストから治癒の権能を受け取り、これを病者や信仰をもってその聖堂を訪れる者、祖国を守る者に惜しみなく分かち与えている。

諸公、貴族たち、あらゆる人々は3日のあいだ祝祭をおこない、神と聖なる殉教者たちに称賛をささげた。その後、それぞれに別れて帰途についた。

ウラジーミル [D1] は、聖棺を金銀で覆い、その棺を飾った。さらに、〔教会の〕円蓋を金銀で飾った。人々はこれに拝礼し、罪の赦しを願った。

この年、しるしがあつた。太陽が欠け、月ようになった。これについては、無智な者たちは、太陽が食われてしまったと語っていた⁸³⁾。

この年、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C4] が逝去した。8月1日だった。〔8月〕2日にはその父スヴァトスラフ [C] の棺の傍らに埋葬された⁸⁴⁾。

82) 当時の慣行から推定すると、神意をうらなう籤は、教会内陣にある宝座に置かれ、子供あるいは盲人が引いていたようである。

83) ユリウス暦 1115 年 7 月 23 日の日食のこと。これは、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C4] の死の 9 日前に起こっており、凶兆として解釈されたと思われる。なお、『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事でも「ムスチスラフ [D11] およびその従士団の馬がすべて死んだ」として凶兆であることが記されている [Новгородская первая летопись: С. 20]。

84) オレーグ公 [C4] の死の日は、『ノヴゴロド第一年代記』諸版では『イパーチイ年代記』と同じ 8 月 1 日だが、ラヴレンチイ系列の写本では、ラヴレンチイ写本が 8 月 8 日、ラジヴィール写本とモスクワ神学大学写本が 8 月 18 日となっており異同がある。どちらが正しいか決定的には定めがたいが、チェルニゴフ系の史料であること、『イパーチイ年代記』では埋葬が翌日であるなどより詳しく書いてあることなどを勘案すると、1115 年 8 月 1 日に死去したとするのが妥当と思われる。

なお、父のスヴァトスラフ公 [C] がチェルニゴフの首座「救世主教会」(Спасский собор) に埋葬されていることから (『原初年代記』1076 年の項参照)、オレーグもこの同じ教会に埋葬されたことになる。

この年、〔ウラジーミル[D1]〕はドニエプル川に橋を架けた⁸⁵⁾。

6624〔1116〕年

ウラジーミル[D1]はグレーブ[L5]を戦争をもって攻めた。なぜなら、グレーブ[L5]はドレゴヴィチ人〔の居住地〕を侵略し、スルチェスク(Случеск)⁸⁶⁾を焼き払い、これを悔い改めず、〔ウラジーミル[D1]に〕従おうともせず、ますますウラジーミル[D1]に逆らって、かれを非難したからである⁸⁷⁾。

ウラジーミル[D1]は、神と正義に望みをかけて、息子たちと、ダヴィド・スヴァトスラヴィチ[C3]、オレーグ[C4]の息子たちを率いて、スモレンスク⁸⁸⁾に向けて行軍した。ヴァチエスラフ[D16]はオルシャ(Ръша)とコピイス(Копыс)を占領し⁸⁹⁾、ダヴィド[C3]はヤロポルク[D15]とともにドリユテスク(Дрьютеск)⁹⁰⁾に強攻を仕掛けて占領した。ウラジーミル[D1]自身はミンスク⁹¹⁾に軍を進めた。グレーブ[L5]は籠城した。ウラジーミル[D1]は陣營のそばで、城壁に向かって攻城楼をつくりはじめた。グレーブ[L5]はこれを見て恐れおののき、使者を遣って和

85) 並行記事が『ラヴレンチイ年代記』の同じ年の項にある。

86) ドレゴヴィチ人はプリピャチ川北岸一帯に居住していたスラヴ人部族で、その中心が「スルチェスク」(Случеск)だった。これはスルチ(Случь)河岸に位置する城市で、ミンスクの南120kmほど、現在のベラルーシの都市スルツク(Слуцк)のこと。当時は、近隣のトゥーロフ同様に、キエフ大公ウラジーミル・モノマフの所領として、代官が派遣されていたと考えられる。

87) 11世紀末～12世紀初頭にはウラジーミル・モノマフ[D1]一族とフセスラフ呪術公[0811:L]一族の確執は続き、1104年にモノマフの息子ヤロポルク[D15]がミンスクのグレーブ・フセスラヴィチ[L5]を攻めたが、このときは失敗している。グレーブはヤロポルク[B2]の娘アナスタシアと結婚しており、姻戚関係からみても、モノマフ一族と対立していたヤロポルク一族に帰属していたと思われる。この遠征は、キエフ大公となったモノマフが、これまで(1113年まで)キエフ大公の権威のもとで威勢を振るっていたスヴァトポルク[B3]の一族を服従させ、一族のルーシにおける支配権を確立する動きの一環と考えられる。

88) ここは、すべての写本が「スモレンスクに向けて」(Смоленську)となっているが、状況からみて「ミンスクに向けて」(Меньську)の誤記と解釈するべきである。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事(6623年)では、1116年1月28日に「ミンスクへ行軍」(пойде к Меньську)したと明記されている。

89) ヴァチエスラフは当時スモレンスクの公座に就いており、船を仕立ててドニエプル川を下り、河岸に位置するオルシャとコピイスを占拠した。この二つの城砦は、グレーブ公の勢力下にあったと考えられる。

90) ドリユテスクはオルシャ、コピイスよりもやや東のミンスク寄りに位置する城砦で、現在のベラルーシのドルツク(Друцк)のこと。

91) この「スモレンスク」も「ミンスク」の誤記と見るべきだろう。前掲の『ラヴレンチイ年代記』並行記事では、モノマフ公は「ミンスクにとどまった」(сам стояше у Меньска)、すなわち城市包囲を行ったと簡単に記されている。当時、グレーブ公[L5]はミンスクに自らの公座を持っており、そこで籠城したのである。[Творогов 1997: С. 524]

議を申し入れた。ウラジーミル[D1]は、大齋の期間⁹²⁾に血が流されることを惜しんで、グレーブ[L5]と和を結んだ。グレーブ[L5]は子供たち、従士たちとともに城市から出てくると、ウラジーミル[D1]に対して拝礼した。和議が始まった。グレーブ[L5]はすべてについてウラジーミル[D1]に聴き従うことを約束した。ウラジーミル[D1]は、グレーブ[L5]と和を結ぶと、すべてについてかれに教えをなし⁹³⁾、かれにミンスクを与え、自らはキエフに帰還した。

ヤロボルク[D15]は、自らが捕虜に獲ったドリユテスクの住民のために、ジェルディ(Жельди)の城砦⁹⁴⁾を伐採して建てた⁹⁵⁾。

この年、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ[D11]は、ノヴゴロド人とプスコフ人を引き連れてチュヂ人討伐の行軍を行い、熊の頭(Медвежа Глава)⁹⁶⁾と称する城砦を占領した。また、多数の郷村を掠奪し、多数の捕虜を獲て帰国した⁹⁷⁾。

この年、ウラジーミル[D1]の婿であるレオン皇子⁹⁸⁾が、アレクシオス帝⁹⁹⁾に逆らって兵を挙げた。ドナウ川沿岸のいくつかの城市が降伏した。しかし、デレストル(Дерьстр)¹⁰⁰⁾の城内で、

92) 1116年の大齋(великий пост)は2月14日～3月26日の期間である。三月式の暦で6624年であることからみて、この時は3月に当たると見てよいだろう。

93) 「すべてについて教えをなす」(наказати кого о всем)の表現は、1117年のヤロスラフ懲罰のための城市ヴラジミル包圍戦の記事にも出現する。秩序維持のための服従の儀礼の遵守を「教えた」と考えられる。

94) 「ジェルディ」(Жельди)はスーラ(Сула)川下流域にある現在のジェルニ(Желни)のこと。

95) ヤロボルク[D15]は当時、ベレヤスラヴリの公座就いており、グレーブ懲罰遠征のためドニエプルを遡航し、ドリユテスクで獲得した捕虜は、いわば遠征の戦利品であった。かれは、多数に及ぶ捕虜を軍船に載せ、400kmもの長距離の川下りの運搬をして、ベレヤスラヴリ公国の南国境地帯に投入した。ポロヴェツなどの遊牧民の襲撃に備えるための城砦建設が主な目的だっただろう。なお、この、ジェルディ城砦の建設については、『ラヴレンチイ年代記』の同じ年の項にはほぼ同じ記事がある。

96) 「熊の頭」(Медвежа Глава)はフィン系の地名「オデンベ」(Odenpääh)をスラブ語に翻訳したもので、現在のエストニアのタルトゥーの南南西約40kmにあるオテパー(Отепää)のこと。

97) 『ノヴゴロド第一年代記』1116年の項に並行記事があり、オデンベ攻略の日を「40聖人の日に」と日付が付されている。これは「セヴァステ湖の40殉教聖人」の祭日のことで、3月9日に相当する。

98) この「レオン皇子」(Леонъ царевичъ)は『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「ディオゲネスの子レオン」(Диогеневичъ)となっており、そこからビザンチン皇帝ロマノス4世ディオゲネス(在位1068年-1071年)の子で共同統治帝だったレオン・ディオゲネスを借称した人物がモノマフ一族の庇護下にあり、モノマフの娘と結婚し(そのため「婿」と呼ばれている)、1116年に起死回生の遠征を試みたが失敗して暗殺されたと考えられている[Kazhdan: 420]。

99) アレクシオス1世。ビザンティン帝国コムネノス朝の初代皇帝(在位1081年—1118年)。

100) 「デレストル」(Дерьстр)はドロストル(Доростол、ラテン語名Durostorum)。現在はブルガリアのドナウ川右岸の港町シリストラ。帝国の属州軍管区(テマ)の拠点地で堅固な城砦を要していた。969年のスヴァトスラフ公[03]の帝国侵攻の際にもルーシ軍は一時占拠しており、971年の皇帝ヨハネ一世との協定はここで結ばれている。ルーシにとってはビザンティンとの接触の入り口のような位置にあった。

皇帝が送った2人のサラセン人の刺客によって謀殺された。8月15日のことだった。

この年、ウラジーミル[D1]大公はイワン・ヴォイチシチ¹⁰¹⁾ (Иван Воитишич)を派遣して、ドナウ川沿岸の〔諸城市に〕代官を置いた¹⁰²⁾。

この年、ウラジーミル[D1]は息子のヤロポルク[D15]を、ダヴィド[C3]は息子のフセヴォロド[C32]を、ともにドン川¹⁰³⁾ (Дон)へと遣った。ふたりは3つの城市、スグロフ(Сугров)、シャルカニ(Шарукан)、バリン(Балин)¹⁰⁴⁾を占領した。その時、ヤロポルク[D15]はヤース人¹⁰⁵⁾の公族の娘を捕虜にして、この非常に美貌の乙女を連れ帰って妻とした¹⁰⁶⁾。

この年、スヴァトスラフ[C]の娘の修道女ブレドスラヴナ¹⁰⁷⁾ (Предьславна)が逝去した。

この年、ヴァチェスラフ¹⁰⁸⁾ [D16]がフォマ・ラチボーリチ¹⁰⁹⁾ (Фома Рагиборич)とともにド

101) キエフでモノマフ一族に仕えた上級従士(貴族)で、年代記にはこのドナウ沿岸遠征が初出だが、1127年にはムスチスラフ公[D11]軍の司令官としてポロツクに遠征を行っている。1139年には、キエフ大公に就いたばかりのフセヴォロド・オリゴヴィチ公[C41]の使節としてノヴゴロドに行き紛争処理に当たっている。さらに、1146年にフセヴォロドの死後の弟イーゴリ[C42]がキエフ大公位を継承すると、大公位を狙うイジャスラフ・ムスチスラヴィチ公[D112: I]の陰謀に荷担している。

102) モノマフ公は婚の偽レオンの謀殺後も、ドナウ沿岸地帯の支配を狙って、主要城市であるドロストル代官を派遣した。

103) 1111年のポロヴェツ討伐遠征に同じ城砦名が登場することから、この川もやはり現在の「北ドネツ川」を指すと考えられる。

104) スグロフとシャルカニは、1111年のルーシ諸公の遠征の記事にも登場する、ポロヴェツ人首長の名を付した要塞。バリンも同様の要塞と考えられる。

105) ヤース人(ясы)とは、騎馬民族であるアラン系で、10～13世紀には黒海からカスピ海にかけての広い地域に定着した部族のこと。12世紀当時は、黒海北岸の「ポロヴェツの地」に居住していた。現在はハンガリーに少数民族として定着している。

106) この1116年のポロヴェツ討伐遠征については、『ラヴレンチイ年代記』系列の年代記に並行記事がある。ただ、『イパーチイ年代記』では、①父のウラジーミル・モノマフが息子のヤロポルクを「派遣した」となっている。②フセヴォロド・ダヴィドヴィチ[C32]の参加が言及されている。③占領した城市の名が、『イパーチイ年代記』ではシャルカニだが、『ラヴレンチイ年代記』ではチェシリューエフ(Чешюев)となっている。④ヤロポルクが連れ帰った妻が「非常に美貌」であると書かれている、などの異同が認められる。これは、共通の資料を、追加記事編者が書き足し、改めたことによる。これは、ヤロポルクの近くにおり、おそらくその妻を直接見たことがあるのだろう。

107) ブレドスラヴナ(Предьславна)はブレドスラヴァ(Предслава)の写本段階での誤記。タティーシチェフはかの女を「女王」(королева)としているが根拠は不明[Гатищев Т. II, 1995: С.131]。かの女についてはスヴァトスラフ・ヤロスラヴィチ[C]の娘であったこと以外は分からない。

108) ヴァチェスラフ[D16]はモノマフの息子で、当時はスモレンスク公だった。この遠征は父モノマフの命令によったものだろう。

109) 父親のラチボール(Рагибор)はモノマフの父フセヴォロド[D]に仕える貴族(上級従士)として、ベレヤスラヴリの代官となり、フセヴォロドが大公になってからはキエフの千人長も勤めていた。また、1079年にはトムタラカンの代官にもなっている。1113年にモノマフが大公となると千人長に復帰していることから、息子のフォマもまた当時は軍司令官として仕えていたと考えられる。

ナウに進攻した。デレスト(Дьръст)の城砦に近づいたが、なにも得るところなく帰国した¹¹⁰⁾。

この年、ポロヴェツ人、トルク人(Торкы)、ペチェネグ人(Печенегы)たちがドン川で戦い、2日2晩合戦があった。トルク人とペチェネグ人はルーシのウラジーミル[D1]のところに来た¹¹¹⁾。

この年、ロマン・フセスラヴィチ¹¹²⁾ [L3]が逝去した。

この年、イーゴリ[F]の孫ムスチスラフ[F21]が逝去した¹¹³⁾。

この年、ウラジーミル[D1]は、自分の娘アガフィアをフセヴォロドコ¹¹⁴⁾ [F11]に嫁がせた。

6625 [1117] 年。

ウラジーミル[D1]はムスチスラフ[D11]をノヴゴロドから呼び寄せ¹¹⁵⁾、ベルゴロドを与えた¹¹⁶⁾。ノヴゴロドにはムスチスラフ[D11]の息子で、ウラジーミル[D1]の孫が座した¹¹⁷⁾。

110) ここの「デレスト」(Дьръст)の城砦は、上記のドナウ川の城市デレストルと同じ。上の記事とのつながりで見ると、モノマフは、婿である偽レオンの挙兵を契機に、婿は暗殺されたものの、デレストルを拠点としてドナウ川一帯の領有を図り、貴族イワン・ヴォイチシチを派遣して攻め取った(降伏した)諸城砦に代官を置いて支配権を保持しようとした。しかし、たちまちビザンティン帝国側に奪還されたようである。そのため、息子のヴァチェスラフ[D16]に貴族の軍司令官を同行させて再度の奪還を図ったが失敗に終わった。

111) すぐ前の1116年のポロヴェツ討伐遠征と同じ「ドン川」での出来事であることから記事の関連性は明白。グミリョフの解釈では、ルーシ軍が撤退した後すぐにポロヴェツが勢力を回復し、この地のトルク人、ペチェネグ人を迫害・追放したため、かれらは同盟していたウラジーミル・モノマフに助けを求めたとしている [Гумилев, 1989: C.320]。

112) ポロツク公で1068 ~ 69年にはキエフ大公に就いたフセスラフ・ブリャチェスラヴィチ [081 : L]の子。諸注ではムーロムで死去したとあるが典拠は不明(例えば [Войтович 2006: C. 285])。また、16世紀の『ニコン年代記』では、1114年にリャザンで死んだとされており異同がある。

113) ムスチスラフ・フセヴォロドヴィチ [F21]。追加記事編者はイーゴリ・ヤロスラヴィチ [F]一族について関心を持っており、1112年にはその息子ダヴィド [F1]の死について記している。

114) このフセヴォロドコはグロドノ公でダイヴィド・イーゴレヴィチ [F1]の息子とする説が有力 [Назаренко 2009: C. 124, 127]。1127年、1132年にモノマフの長男ヤロスラフ [D11]の遠征に参加しており、モノマフ一族の影響下にあった。モノマフの娘アガフィアとの結婚も、キエフ大公であるモノマフの支配権拡大政策の一環だろう。

115) ムスチスラフ [D11]の公座遷移については、『ノヴゴロド第一年代記』の1117年の項に「ムスチスラフはノヴゴロドからキエフへ公座に就くために行った。3月17日だった」 [Новгородская первая летопись: C. 20]とある。ここでは日付があり、また、あたかもキエフ公になるかのような書き方がなされている。

116) ベルゴロドはキエフ北方10kmほどにある城砦都市で、ノヴゴロドに比べれば政治的、経済的な意味ははるかに小さい。この措置は、自分が死んだときに(モノマフはこの年65歳の高齢である)、キエフ市民の暴動や他の一族の諸公のキエフ大公位篡奪の動きを未然に防ぎ、スムーズに公位を長男のムスチスラフに譲ることができるようとの、モノマフの配慮からきたものと考えられる [Кривошеев 1993: C.44]。実際、ムスチスラフは7年後の1125年、モノマフが没してすぐにキエフ大公位を継いでいる。

117) フセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111]、洗礼名ガヴリールのこと。

この年、ウラジーミル [D1] はヤロスラフ [B32] を討伐するために¹¹⁸⁾、ダヴィド [C3]、オレー

118) この1117年のヤロスラフ [B32] を攻めた城市ヴラジミル包囲については、『ラヴレンチイ年代記』では6626(1118)年の項に「ウラジーミル [D1] はヴラジミルにいたスヴャトボルクの子ヤロスラヴェツ [ヤロスラフの蔑称] [B32] を攻めたが、これと和を結んだ。そしてウラジーミル [D1] はかれに大いに腹を立てたまま立ち去った」と短く記されており、『イパーチイ年代記』の記事のほうがはるかに詳しい。また、ウラジーミル・モノマフの『教訓』には「私たちはヤロスラヴェツを攻めにヴラジミルへ行った。かれの悪行 (злобы) に我慢できなかったからである」[ロシア原初年代記:270頁]という文言が見える。遠征の年代は決定的に定めることは難しいが、1118年とするのが通説である。

1054年、ヤロスラフ賢公の遺言によって、城市ヴラジミルはその末子にあたるイーゴリ [F] に分領された。イーゴリの死後(1060年)、キエフ大公イジャスラフ [B] の戦死を受けて1078年に大公位に就いたフセヴォロド [D] は、同年、前大公の子ヤロボルク [B2] をヴラジミル(およびトゥーロフ)の公座につかせている。このように、城市ヴラジミルの公座にある公は、はっきりと長幼序(старшинство)が下位にあり、ときのキエフの大公の指示に従うという原理は、11世紀後半～12世紀初めの公族の間で制度となっていたようである。それにしたがって、1084年にはヴラジミルの公ヤロボルクは、復活祭の祝宴のためキエフ大公のもとにいわば参内しており、同年ヤロボルクが一時ヴラジミルを追放されたときには、フセヴォロドが援軍を派遣している。1085年にヤロボルクが、フセヴォロドへの反抗を試みたとき、大公フセヴォロドは派兵してかれを追放し、一時的にイーゴリ [F] の子ダヴィドを公座に据えたが、その後和解して、1086年にはヤロボルクが公座に復帰した。ヤロボルクはまもなく暗殺され、公座は再度、ダヴィドの手に渡された。1093年にフセヴォロドが死んで、スヴャトボルク [B3] がキエフ大公位に就いてしばらく後の1099年から、城市ヴラジミルの公座は、ダヴィドとキエフ大公の息子たち(ムスチスラフ [B1] とヤロスラフ [B32]) の、激しい領有権争いの対象となり、1097年にその戦いでムスチスラフが戦死するなどしたのちに、1100年には、キエフ大公スヴャトボルクの命令によってヤロスラフの公座が定まった。

その後、しばらく公座は安定していたが、1113年にスヴャトボルクの死にともなって、ウラジーミル・モノマフ [D1] がキエフ大公位に就くと、大公の命令で公座を移されることを危ぶんだヤロスラフは、1117年のムスチスラフ [D11] のノヴゴロドからベルゴロドへ遷移によって、自分の大公位継承の可能性が潰れたことを機に(ヤロスラフはムスチスラフの娘と結婚していることから、かれにとってムスチスラフは「父」であり、長幼序は明らかに下位となる)、1118年に、ポーランドの援助を得て、服従を示す儀礼を行わないなど、独立的な行動をとるようになったと思われる。これは、動機の上では、1085年の父ヤロボルクのキエフ大公への反抗と同様と考えてよいのではないか。これから判断すると、『教訓』に言うヤロスラフの「悪行」(злобы) は長幼の秩序の破ることを意味しているだろう。そして、この行為に、公族の統治原理の重大な侵犯を見たモノマフは、諸侯連合軍を組織して、懲罰の遠征を行った。長期の籠城で疲弊したヤロスラフが「自分の叔父であるウラジーミルに叩頭した」(вдаришно челомъ передъ стрьемъ своимъ Володимеромъ) ことは、明らかに、従来の長幼秩序とウラジーミル・モノマフの優位性を承認する儀式を指している。

なお、16世紀の『ニコン年代記』ではヤロスラフの反抗の動機として、「ヤロスラヴェツがかれ [モノマフ] の孫であり、ムスチスラフの娘」である自分の妻(アナスタシア)に憤った(негодую) からだとしている [Соловьев Кн. 1: С. 391, 682 прим. 161]。しかし、これは『ニコン年代記』に多く見られる合理化による後付けの解釈のひとつではないか。

グ[C4]の息子たち¹¹⁹⁾、ヴォロダーリ[A12]、ヴァシリコ[A13]を引き連れて、ヴラジミルの城市へ行軍した。かれらはヴラジミルを取り囲み、60日のあいだ包囲を続けた。そして、ヤロスラフ[B32]と和議を結んだ。ヤロスラフ[B32]は屈服して、自分の叔父であるウラジーミル[D1]に叩頭した。ウラジーミル[D1]はすべてについて教えをなし、「自分が呼び出した」とときには出頭するようにと命じた。和議の後に〔諸公は〕故郷へと別れて去って行った。

このとき、ポロヴェツ人はブルガールへ攻め込んだ。ブルガール人の公はポロヴェツ人に毒の入った酒を贈った。アエパ(Аепа)をはじめポロヴェツの公たちは、これを飲んで、皆死んでしまった。

この年、ペレヤスラヴリの主教ラザリ¹²⁰⁾が逝去した。9月6日だった。

この年、ペロヴェジ人(беловежцы)がルーシにやって来た¹²¹⁾。

この年、ウラジーミル[D1]は、トゥゴルカン(Тугъртъкан)の孫娘を、〔息子の〕アンドレイ[D18]の嫁にとった¹²²⁾。

119) この個所は、イパーチイ、フレブニコフ両写本とも"Давыдь Ольговичъ"と読めるが、この時代にこの名の公は存在しない。そこで、"Ольговичъ"を"и Ольговичи"の誤写と判断して、"Давыдь и Ольговичи"(ダヴィド〔・スヴァトスラヴィチ〕公[C3]とオレグ公[C4]の息子たち)と読むのが現代語訳の通説になっている[БЛДР Т.1: С. 315]。その場合、オレグの息子たち(フセヴォロド[C41]、イーゴリ[C42]、スヴァトスラフ[C43]、グレーブ[C44])のうち複数がヤロスラフ懲罰遠征に参加したことになる。

120) ラザリはモノマフ一族の相続領ペレヤスラヴリの主教であり、モノマフからもっとも篤い庇護を受けていたと考えられる。1115年の聖ボリスとグレーブの移葬にも参加している。

121) このペロヴェジ人(беловежцы)は、ドン川下流域の通商の要所にあるハザールの城砦ベーラヤ・ヴェジャ(Белая Вежа)(ハザール語で「白い家」を意味するサルケル(Саркел)の住民のこと。『原初年代記』の965年記事にあるスヴァトスラフ・イーゴレヴィチ[03]の占領以降は、この地はルーシの影響下に置かれ、ハザール系、スラブ系の住民が住んでいたと考えられる。カラムジンはこのペロヴェジ人を「ハザール人」(Козары)と解釈しているおり、モノマフによってオステル川上流域に同名の集落を築いて定住したとする[Карамзин Т. II-III: С. С. 93]。前年、1116年のトルク人、ベチェネグ人がモノマフへの帰順した事実とのかかわりで見ると、やはりポロヴェツの圧力に耐えられなくなり、城砦を放棄してルーシの地(キエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリー帯)に移住した住民(大半はスラブ人)と解釈するのが妥当だろう[Гумилев, 1989: С.320]。

122) トゥゴルカンはボニャク(Боняк)と並ぶ当時もっとも有力なポロヴェツの族長の一人で、アンナ・コムネナの歴史にもその名が記されている。『原初年代記』では1094年の記事(ラヴレンチイ写本のみ欠)に「スヴァトボルク[B3]がポロヴェツと和を結び、ポロヴェツの公トゥゴルカンの娘を自分の妻に迎えた」とあり、モノマフの『教訓』にも並行的文言として「その後トゥゴルカンおよびポロヴェツのその他の公たちと和を結び」とある。1096年にはペレヤスラヴリを包圍攻撃したが、モノマフとスヴァトボルクの反撃にあい、7月19日にトゥルベジ川の合戦で息子とともに戦死した。かれの一族はその後ルーシを脅かし、モノマフは若い(15歳)アンドレイに「孫娘」を娶らせることによって、ペレヤスラヴリ地方の南境界地帯の安定化を図ったと考えられる[Плетнева 1990: С. 64]。これは、『原初年代記』1107年の1月の項にモノマフが族長「アエパの娘、オセニの孫娘をユーリイ[D17]の嫁に取った」と同様の性格を持っており、和議の遂行保証としての政略結婚と推定される。

この年、大地が揺れた。9月26日だった。

この年、ウラジーミル[D1]はグレーブ[L5]をミンスク〔の公座〕から追い払った¹²³⁾。

リタ(Льта)川河岸¹²⁴⁾に、殉教者〔ボリスとグレーブ〕に献じた教会が定礎された。

ウラジーミル[D1]は、息子のロマン[D14]をヴラジミルに、公として統治するために派遣した¹²⁵⁾。

この年、アレクシオス帝(куръ Олексий)¹²⁶⁾が死んだ。その息子ヨハネス(Ивань)¹²⁷⁾が皇位を継いだ。

123) 1116年にミンスクを攻められて降伏したグレーブ公は、服従を誓ったあとでモノマフ公によってあらためてミンスクの公位を安堵されたが、これは一時のことだった。かれはモノマフの手で公座から排斥され、1119年にはキエフに連行され、同年、そこで没している。

124) リタ川(Льта)は、現在のアリタ川(река Альта)のこと。ドニエプルの支流トルベジ川(Трубей)のさらに支流で、現在のウクライナのペレヤスラヴリ=フメリニツキイの北郊外にある。キエフから南東に約75km。ボリス公が殉教した記念すべき場所。文脈からみて、ウラジーミル・モノマフの主導によって、この献堂がなされたと考えられるべきだろう。

125) モノマフは、服従を誓ったヤロスラフ[B32]をそのままヴラジミルに留め置くことはせず、ヴォルニニ地方にいた息子のロマン[D14]をヴラジミルの公座に据えた。すでに『キエフ年代記集成』になる1118年の記事の冒頭には「ヤロスラフ・スヴァトボルティチがヴラジミルからハンガリー人のもとへ逃げ出した」とあり、ロマンが(すなわち父のモノマフが)ヤロスラフを追放したことがわかる。

126) アレクシオス・コムネノス1世。ビザンティン帝国コムネノス朝の初代皇帝。1118年8月15日にコンスタンティノポリスで没している。

127) ヨハネス2世はアレクシオス1世の息子で、コムネノス朝の第2代の皇帝(在位1118年-1143年)。父の死後すぐに即位をしたとされる。

シャフマトフをはじめとする研究によれば、追加記事編者の手になる記事はここまでで、この記事も含むとされている。その論拠として、ビザンティン帝国の皇室の政治に深いかわりを保っていたモノマフ一族のいわばお抱えの年代記記録者にとって(1116年のレオン皇子の挙兵など)、皇帝の交替は記録に値する出来事だったとする。その場合には、追加記事編集は1118年の後半(8月以降)に行われたということになる。しかしながら、6626(1118)年のに起こったことが明らかな事件が、ここでは6625(1117)年の記事の最後の出来事として書かれているのは不思議である。

参考文献

- БЛДР Т. 1 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 1: XI-XII века. СПб., 1997.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтий, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Гумилев 1989 — Древняя Русь и Великая степь. М., 1989.
- Грушевський Т. 2 — Грушевський М. С. Історія України-Руси: Т. 2. XI-XIII вік. К., 1992.
- Грушевський 1991 — Нарис історії Київської землі від смерті Ярослава до кінця XIV сторіччя. К., 1991.
- Древнерусские летописи, 1936 — Древнерусские летописи. / Перевод и комм. В. Панова. Ред. В. Лебедева. Статьи В. Лебедева и В. Панова. М.;Л., 1936. (Серия «Рус. мемуары, дневники, письма и материалы»).
- Карамзин Т. II-III — Карамзин Н. М. История государства Российского в 12-ти томах. Т. Т. II-III. М., 1991.
- Комментарии 2012 — Бобров А. Николаев С. Чернов А. Комментарии к Повести временных лет // Повесть временных лет / пер. Д. С. Лихачева, О. В. Творогова. СПб.: Вита Нова, 2012.
- Кривошеев 1993 — Кривошеев Ю. В. Пути и труды Владимира Мономаха. СПб., 1993.
- Летопись 1871 — Летопись по Ипатскому списку. СПб., 1871.
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
- Літопис Руський — Літопис Руський / Пер. з давньорус. і коменттар Л. С. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К., 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Лихачев 1947 — Лихачев Д. С. Русские летописи и их культурно-историческое значение. М.; Л., 1947.
- Львова 2008 — Львова З. А. Стекланные бусы Старой Ладоги как исторический источник // http://chernov-trezin.narod.ru/ZLATA_LVOVA.htm
- Назаренко 2009 — Назаренко А.В. Городенское княжество и городенские князья в XII в. // Древняя Русь и славяне (Древнейшие государства Восточной Европы, 2007 год) М., 2009. С. 124-161.
- Новгородская первая летопись — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.;Л., 1950.
- Петрухин 2013 — Петрухин В. Я. Киевское восстание 1113 года и еврейский погром (в интерпретации В. Н. Татищева) // Славяноведение 2013, №2, С. 3-11.
- Плетнева, 1990 — Плетнева С. А. Половцы. М., 1990.
- Приселков 1996 — Приселков М. Д. История русского летописания XI - XV вв. СПб., 1996
- ПСРЛ Т.2, 1843 — Полное собрание русских летописей: Том 2. Ипатьевская летопись. СПб., 1843.
- ПСРЛ Т.2, 1908 — Полное собрание русских летописей: Т. II, Ипатьевская летопись Издание 2-е. СПб., 1908.
- ПСРЛ Т.2, 2001 — Ипатьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том второй.) - 2-е изд. М., 2001.
- Русские летописи Т.11 — Русские летописи: Т. 11: Ипатьевская летопись. Рязань, 2001.
- СККДР Вып.1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987.
- Соловьев Кн.1 — Соловьев С. М. Сочинения. Книга 1. История России с древнейших времен. Т. 1-2. М., 1988.

- Татищев Т. II, 1995 — Татищев В. Н. Собрание сочинений Тома II и III: История российская. Ч. II. М., 1995.
- Творогов 1997 — Повесть временных лет // Библиотека литературы Древней Руси / подгот. текста, пер. и комм. О. В. Творогова. СПб., 1997. Т. 1.
- Шахматов 2003 — Шахматов А. А. История русского летописания. Т. 1, Кн. 2. СПб., 2003
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I-VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.
- Kazhdan— Alexander Kazhdan, “Rus'-Byzantine Princely Marriages in the Eleventh and Twelfth Centuries.” *Harvard Ukrainian Studies*, 12/13. 1988/89. pp. 414-429
- スズダリ年代記訳注 [I] — 「スズダリ年代記 訳注」『古代ロシア研究』20号, 2000年。11～52頁。
- リューリク王朝系図索引 — 「リューリク王朝系図索引」『古代ロシア研究』第14号 (1981年11月), 35～57頁
- ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987年

〔後記〕本稿は、2013年度から行ってきた、共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり、共同研究者は藤田英実香（富山大学人文学部研究生）である。